
短編集ハキダメ

こたろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集ハキダメ

【Nコード】

N7282T

【作者名】

こたろう

【あらすじ】

もっと気軽に書ける場所が欲しいと思い、設置しました。

整形

整形って、皆さんどう思われるでしょうか。

私は整形してます。

目、とか鼻ですね。元々の形が気に入らなかったもので。

今の彼は、その目と鼻が特に好きみたいで、褒められると……少し焦ると同時に、努力を認められたようで嬉しいです。

職場でも好評で……整形以前からの職場なんですが、微妙な変化なので気づかれていないと思います。ただ、最近綺麗になったとか、大人っぽくなったとか言われます。正直、かなり嬉しいですね。整形、大成功です。最初に二重にする時はやっぱり迷いましたけど、今では本当にやって良かったと思います。

そんな感じで、整形後は順風満帆な感じの毎日なんですけど、少しだけ気がかりなことがあります。

先日入社した職場の後輩……女の子なんですけど、とっても可愛い子なんです。なんか……わかりますか？ 失礼ながら、紙一重で不細工な部類かもしれません、その子。けど、顔全体で絶妙なバランスが取れてるんですね。

特に感じるのが、自然な可愛さ……整形の私にはもうない天然感ですね。悔しいというか、何というか、わからなくなっちゃいますね。整形したの、そもそも間違ってたのかなって。

だって、職場の人や彼は相変わらず褒めてくれるけど、全部知ってる両親との関係は少しぎこちなくなってしまうましたし……。

親不孝……一番最悪なのかな。

可愛なくなっちゃって、太っちゃって、皆さん毎日明るく楽しく生活されています。じゃあ、整形をしなきゃそれができなかった私って、一体なんなんだろうって、思います。

でも、私は元の顔に戻る気はありません。もう戻せませんし、意地もあります。

こうでしか生きれなかった自分を、肯定するしかないんです。彼氏とも仲良くしたいですし、職場の人にも変に思われたくありません。

私はいつか、こう言われるかもしれません。

「お前の顔、歪だよ」って。

それを恐れてるのと同時に、誰かがそう言ってくれるのを待ってる、そんな気がします。

私の努力がどうせ認められないなら、いつそ全てを否定して死なせて欲しいって、そう思います。

整形（後書き）

ありがとうございました。

はっぴい猫（前書き）

以前書いたものを無理矢理仕上げました。せつかなので公開します。

今はこういうの、わがままだけと書きたくないかも。だから、こっちの方が読みやすかったりしたらごめんなさい……。

はっぴい猫

1

はっぴい猫の色は白。黄色も混じった綺麗な毛の色。子供達に人気の猫。今日はゆうちゃんに呼ばれて猫通りから出てくる。

猫通りというのは、ゆうちゃんが友達とよく遊ぶ空き地と隣の家との間の隙間で、ゆうちゃん達が体を横向きにしてどうにか通れる場所だ。色々な猫がいるから、猫通りと呼ばれている。

はっぴい猫は出てきて早々、にやあともすんとも言わず真顔で、しやがんだゆうちゃんの顔を前足タッチした。

ゆうちゃんは慌てる。

「やめてくださいよお」

タッチを受けた次の瞬間には、爪で引っかかれるという噂だ。ゆうちゃんは小学五年生で、肌はもちもちしている。それがズバツと切り裂かれたら、やばい。

「はっぴい猫、そんなのしないで、私をはっぴいにしてください」

はっぴい猫はその名の通り、みんなをはっぴいにする猫。ゆうちゃんの隣の家のお兄さんはずっと独身だったけど、はっぴい猫のお陰で結婚した。

「私も彼氏が欲しいです」

ゆうちゃんは「はっぴい猫さま、はっぴい猫さま」とお祈りした。

（駄目だ。君にはまだ早い）

ゆうちゃんの中に、はっぴい猫の心の声が聞こえた。ゆうちゃんは、少しぎよっとしたが、何でだよ！ 私はもう小五だよ！ と心の中で暴言を吐いた。

（何でもだ。早いと言ったら早い。君の両親はそんなに早いのは望んでいない）

はっぴい猫は、前足を通して相手とを考えをやりとりするのが得意だ。ゆうちゃんの思ったことは全部筒抜けだった。家の鍵の隠し場

所も、初恋が二年生の時だというのも、全部バレた。

（初恋の相手は担任の先生か。しかも妻子持ち。しかもまだその気持を引きずっているときている。最近の子供はみんなこうなのか？ 私は眩暈がしてきた）

はっぴい猫は険しい顔をした。

「うるさいですよ……」

ゆうちゃんは涙目で言う。ふるふる震えて続ける。

「私は、みんなが悲しまないで、はっぴいになれたらいいのに……
って、思います……」

ゆうちゃんが思ったのはつまり、初恋の先生とゆうちゃんが愛し合って結婚して、でも奥さんと子供は全然怒らなくて、どこか遠くの国で幸せになってくれればいいのに、という内容だ。

（君は魔王だな。独裁者の思考だ。先生を奪われた奥さんと子供が幸せになる——その勝手な思い込みは、いずれ君自身を支配するぞ）
ゆうちゃんには、はっぴい猫の語ったことがよくわからなかったけど、否定されているのは、はっきりとわかった。

頭の中のことをずっと全部見透かされてるのも恥ずかしくて、その上で否定されているのがもっと恥ずかしくて、ゆうちゃんは半分、自棄になって言った。

「もう、もう！ いいから私を十九歳くらいの大人にしてくださいよ！ できるんでしょ！」

（それならできる。身体を大人にするだけなら私の倫理的にも全く問題はない）

はっぴい猫の力は、彼の倫理観に沿う形でしか使うことができない。しかし、その制約はあくまでも形式上のことだ。

（大人になった君がその後何をしようと、私には関わりのないことだからな）

「いいから、早くやってよ！」

ゆうちゃんは、ぼろぼろ涙しながら叫んだ。

（そう焦るな）

はっぴい猫が、ゆうちゃんを見つめていた丸い瞳を閉じると、ゆうちゃんの額に触れた肉球からぽわぽわした暖かい感じが広がって、それはゆっくりと全身を包んだ。

はっぴい猫に合わせてしゃがんでいたゆうちゃんは、その姿勢のまま地面から浮き始めた。はっぴい猫が、タッチしていた前足を地面に置いて、閉じていた目を開けた時には、ゆうちゃんの身体は地上より一メートル上を、暖かい感覚を纏ってふわふわ浮遊していた。「気持ちいい……」

ゆうちゃんが思わず呟いたそれは穏やかな気持ちよさだったが、次にゆうちゃんは、それと相反するような激しい快感に襲われた。まるで自分が植物になったみたいに、急速に成長していく感覚。しかしそれは、感覚だけに止まるものではなかった。「うつつ」

まず、手の神経に強烈なもどかしさを感じると同時に、指先がぐいぐいとその長さを増していく。足先も同様に、いくら伸びをしても足りないような気怠さが駆け巡った。

それは程なくして全身に廻り、ゆうちゃんの中にある梱包材のプチプチのような快感中枢が全て潰され、中から飛び出した液体が宇宙に勢い良く巻かれる、そんな夢のような現実を三周半程体感したゆうちゃんは気を失い、ビリビリの細切れになった服の破片の上に汗だくの全裸で横たわっていた。

はっぴい猫はそれを退屈そうな顔で見ると、ぷいと後ろを向き、トコトコと猫通りに帰って行った。

「……！ げげほっ！」

ゆうちゃんは、辛い咳をして目を覚ました。声が少し低く、出しにくくなった気がする。

まだポカポカする身体を起こして、ゆうちゃんは自分を見回す。平らだった胸も、短かった脚も、大人のもの。ゆうちゃんは、十九歳の、大人の身体になっていた。

「は、はっ、はっぴい猫！ はっぴい猫ー！」

ゆうちゃんの悲痛な叫びに呼ばれて、はっぴい猫はまた猫通りから顔を出す。

「私は、君を大人にした後は一切干渉しないつもりでいたのだが……」

「服ぐらいは出して下さい……！ 寒いです、恥ずかしいです。誰かに見つかったら、色々まずいです……！」

大きくなったせいで、もう身体を横にしても猫通りには入れなくなったゆうちゃんは、猫通りの前で四つん這いになって、必死な顔で「はやくうー！」と小声で叫んだ。

見兼ねたはっぴい猫は、再度、ゆうちゃんの額を前足タッチ。すると、ぽぽぽん、と可愛い小爆発が起こって、ゆうちゃんは雑誌のモデルが着るような服を着ていた。モコモコのコートに、ジーンズ、ブーツ、ふわふわの帽子。それだけでもゆうちゃんは未体験のオシャレだったので、十九歳の身体でぴょんぴょん跳ねてはしゃいだ。

「ありがとう、はっぴい猫。これで――」

「何だ」

ゆうちゃんの表情は、ファッションをはっぴい猫に披露するポーズをとったまま、固まっていた。

「は、はっぴい猫、普通に喋れるんですね。口で……」

はっぴい猫が不思議な猫だということは重々承知していたゆうちゃんだが、猫が口を開いてそこから人語が飛び出すというのは、視覚的に相当のインパクトがあった。

「猫も犬も本来、喋るものだ。ニャア、とか、ワン、とかで我々が意思の疎通をできていると思っていたのか？ ただ皆、人間を見下して、まともに対話をしようとしなかっただけだ」

「そ、そうなんですか……」

ゆうちゃんは、その事実にかなり青ざめたが、とりあえず今は自分の目的を果たすことの方が先だった。

「先生に会ってきます……。先生に、大事にしてもらうんです。私だけを」

「……その行いが何を意味するのか、何を招くか、それすらもわからないか。……愚かだ。しかし、それもいいだろう。君の間違いを、この世界にぶつけてこい」

はっぴい猫はその存在の性質上、能力が倫理に縛られるが、彼自身が持つ価値観は至ってニュートラル、彼の行動スタンスは、他者を正しく導くことでもその逆でもなく、自由にすることにあつた。

はっぴい猫の言葉に、ゆうちゃんは「はい、頑張ってきます」と答えた。

（愚かさ、それ自体が人間だというのなら、彼ら、彼女らに我々ができること、それはただ、見守ることだけなのか）

ゆうちゃんの隣の家の、ずっと独身だったお兄さんは、はっぴい猫から、無限に湧き続ける自信を貰った。そのお陰で彼は生き生きとした表情になり、可愛い奥さんもゲットしたのだが、自信はいつしか慢心に変わり、周囲への態度は次第に横柄なものになり、今では街に繰り出して女を取っ替えひっかえの日々を過ごしている。道の向こうで、はっぴい猫に行ってきますと手を振るゆうちゃんは、それを知らない。

（無限の自信は彼を幸福にしたかもしれない。だが、彼の通った後では多数の不幸が量産されている）

しかし逆に、他者への思いやりが人を幸福にするかと問えば、それは定かではない。と、はっぴい猫は考える。

（他者を思えば、それと同時に悲しみも抱える。マイナスが広がっていく世界、それを、はっぴい猫である私は本能的に恐れている）
はっぴい猫は呟く。

「幸福は、別の誰かが、又は、別の立ち位置にいる自己から見れば、全くの幻想だ。夢を見せられているのに等しいそれは、余りに空虚

――
『虚しく思うなら、無意味に思うなら、そんな世界、終わらせちゃ

えばいいんだよ』

空間全体に反響するソプラノの声。その振動の振れ幅が徐々に増大し、猫通り周辺の木々が音を立て激しく揺れた。

影が——その場のありとあらゆる物体の影が吸い寄せられるように、はつぴい猫の頭上に収束していき、禍々しい暗黒を作り出す。不定形、二度、三度形を変え、ぎよりと、中央に赤の眼が二つ開きはつぴい猫を突き刺すような視線を発した時、それは黒い猫の形となつて、この世界に出現した。

「シャドウ猫！」

「チャオ、久しぶりだね」

地上に降り立った赤目の黒猫——シャドウ猫は、はつぴい猫を横目に、妖しく撫でるように見て、ゴロニャーんと、簡易な猫言語で挨拶をした。

「いやいや見てたよ、君、マジで空気読んで欲しいよね。ゴロニャンじゃ会話通じないとか、実は人語ペラペラとか人間に言っちゃつて。ていうか実際、猫言語でも全く意思が通じないわけじゃないでしょ」

「不幸をばら撒きにきたか」

すると、シャドウ猫は目を丸くしてはつぴい猫を見つめ、次の瞬間にはプハーッと吹き出して笑い声を上げた。

「あつはは！ どっちが！ 不幸の手助けをしてるのは君でしょ。マジで何がしたいわけ？ 意味不明——」

「見境なしに振り撒く悪意、それによつて傷ついていくのは、君自身だぞ」

「バーカ。超噛み合つてない。あんたとの会話、人間への干渉、全部時間の無駄だわ。あたし帰るね——」

その言葉を残して、シャドウ猫は地面に吸い込まれるようにして消えていった。

いつもの通学路を走りながら、ゆうちゃんは向こうの街のビルの間に落ちていく夕日を見上げる。

（先生の家は私、わかりません……）

だからゆうちゃんは、学校の校門で先生を待ち伏せしようと考えていた。

もし先生が定時上がりなら、急がなきゃいけない。先生が校門を車で出る前に会わなきゃいけない。

はっぴい猫の力がどれだけ続くのかもわからなかったけど、大人の姿ではきつと家に帰れないし、ゆうちゃんが急に大人になったなんて、きつとお父さんもお母さんも誰も許してくれない。

でも先生だけは、この姿を認めてくれるはず。先生の為に大人になったんだもん。そう考え、ゆうちゃんは一生懸命走った。

小学校の前にさしかかった時、ちょうど町内に五時のチャイムが鳴った。子供はもう、帰らなきゃいけない時間だ。でも今のゆうちゃんは子供じゃない。

（二年生の時は、どんなにアタックしても冗談だっと思ってわれてあしらわれた。先生には家族がいるからって言われた。あの時はそれがよくわからなかったけど、今ならわかるよ。私は先生に家族がいたっていい。みんなじゃなくて、私を見て欲しい。私だけを見て欲しい）

その時、校門から一台の青いスポーツカーが飛び出した。ゆうちゃんは、「キヤッ」と驚いて地面に尻もちをついた。

「おおお！ すまんキミ！ 急いでいたんだ」

そう言ってウィンドウから顔を出したのは、三十代の眼鏡の教師ゆうちゃんが小さな体と幼い心ですつと想っていた、今も想い続けている優しい先生だった。

家族想いで、子供が生まれてからはずっと定時上がりの先生。そんな優しい先生をみんなが誉めた。ゆうちゃんも誇りだった。

「……好きです、先生」

ゆうちゃんはしゃがんだまま、息切れしたままで、いきなり告白

した。

「はっ？」

先生の目を見つめながら立ち上がって、先生の車より高い自分の身長や格好に気づいて、ハッとしてまた言う。

「野崎優です。二年二組で先生のクラスでした」

「あ……あ……？」

先生は目を丸くした。「野崎、野崎……」と、上を見たり下を見たりして一生懸命考える。

その視線が時々、ゆうちゃんの汗ばんだ胸元で止まった。

今のゆうちゃんの外見はすごく可愛いし、服装を含めて先生好みだ。先生のことを想って、ゆうちゃんは大人になったのだから。

きつと、先生にも魔がさした。

「……お、憶えてるよ野崎。何年ぶりかな。綺麗になったね」

先生は低い声で、囁くように言った。ゆうちゃんのことだけを見て言った。

ゆうちゃんは、それが嬉しかった。

「少し話でもするか。僕も君を教えていた頃のことを思い出したい。乗りなさい」

そう言われて、ゆうちゃんは飛び跳ねるように助手席にまわって車に乗り込んだ。

車の中で、ゆうちゃんは先生と色々な話をした。ゆうちゃんは本当は小学五年生だから、そのほとんどが噛み合わなかったけど、先生もゆうちゃんもずっと笑顔だった。

ゆうちゃんが今は十九歳だということも、先生に話した。

約一時間のドライブの後、先生は人気のない公園に車を停めた。ゆうちゃんの知らない公園だ。先生に訊いたら、ここは隣町だと言われた。

「隣町……私、来たことなかったんです。なんかドキドキします」
ゆうちゃんが知らない場所。ゆうちゃんのことを誰も知らない場

所。そこで先生と二人きり。

ゆうちゃんは子供だけど、この後先生とどうなるかはなんとなくわかっていた。

先生の携帯はさつきからずっと鳴りっぱなしだったけど、先生は一度も出ずに、遂には電源を切った。

「先生……」

先生が全部を捨てて、自分だけを見てくれた。先生が自分の為に、悪者になってくれた。

誰からも誉められなくなった先生が、運転席から身を乗り出して顔を近づけるのを、ゆうちゃんは目を閉じて迎えた。

「あ……っ……！」

その時、ゆうちゃんの身体がシートの上を軽く跳ね上がった。赤黒い電流が指先を走り、ゆうちゃんは激しく痙攣をして、直後、全身を冷たく暗い感覚に襲われた。

「ああ……」

余りの驚きに固まる先生の前で、ゆうちゃんは元の小学五年生の身体に戻っていた。

「シャドウ猫……君か」

十五階建てビルの屋上から公園の様子を見下ろしていたはつぴい猫は、横を向いて、何もない夜の空を静かに睨んでそう言った。

そこにシャドウ猫は、闇から這い出すようにして出現した。とんと、と前足から着地を決め、綺麗な赤い舌を出す。

「はつぴい猫、あんた干渉しないとか言ってたくせにさ、言ってることが二転三転。頭悪いっしょ？」

「干渉はしていない」

「はい、屁理屈っ！」

はつぴい猫はそう言われて、シャドウ猫からそっぽを向いた。からかうような態度だったシャドウ猫は、その丸い後頭部を見つめるうちにだんだんと真剣な表情になった。

「……気持ち悪い奴。うだうだそれっぽいこと言って、結局傍観してるだけ。あたしよりずっと大人なのにね。情けない奴」

はっぴい猫は振り向いて、少しだけ視線をやった。

「私は人の意思を尊重する。それが例えどんなに間違った意思であっても、私は人が自ら歩む道を妨げようとは思わない」

「あー！ この童貞猫、あたしマジで無理！ 自分を善人だと勘違いしちやってる奴が一番タチ悪いってえー！」

「……」

はっぴい猫は、シャドウ猫の妨害すらも彼女の意味として尊重した。全てを流れのままにした。

はっぴい猫は考える。丸い顔を顰めて、眉間に皺を寄せて考える。（傍観であっても構わない。自らの意思で人を不幸にすることは、はっぴい猫である私には決して許されない）

遠くを見つめるはっぴい猫を見て、シャドウ猫は少し悲しそうな顔をした。

「……ビビってるだけじゃん」

「なんですか！ なんですかはっぴい猫！」

ゆうちゃんは夜空に向かって泣き叫んだ。慌てた先生にゆうちゃんは車から降ろされ、置き去りにされたのだ。

大きくて首周りの広い服は、肩からずり落ちて、ゆうちゃんはまた裸で、泣きながら、はっぴい猫と先生の名前をずっとずっと、呼び続けていた。

はっぴい猫（後書き）

ありがとうございました。

続きも書けそうだけど、ぜったい今の変な書き方になっちゃいます

（笑）

昔の自分は好きですけど、昔の自分にわざわざ戻ろうとするのは苦痛かもしれません。

連載乱発といい、自分本位な作者でごめんなさい。

私にも人をちよつとでも楽しませたりできるなら、頑張りたいです。

高校の頃。 1

あつ、高校るとき剣道部にいたヤバい奴のことを思い出した。ちよつと今日はその話をさせてくれ。

そいつな、うーん、なんて説明すりやいいかな。とりあえず強いんだよ。強いんだけど、大会は出してもらえないんだ。ヤバいからどうヤバいかってな……

うーん、これちよつとありえないんだけどな、竹刀を離さないんだよ、そいつ。

「うあつ！」

「やめっ……いて！」

新聞部だった俺が剣道場に顔を出した時、それはもう始まっていたんだ。

一人の防具姿の部員が、丸腰の部員を次々に打ち倒して行く光景に、俺は啞然とした。

「なんだよこれ」

俺は扉近くにいた一年に訊いた。

「へっ、えっ？ えと、二年の先輩が、山田先輩が！ 試合後に！ 急に！」

「お前の説明要領得ねー！ けどなんとなくわかったわ」

とりあえずスクープならなんでもいい。退屈な練習試合の記事なんかよりはずっといい。カメラを構えて俺はその惨劇の様子を激写した。

「だめだ！ 誰か止める山田を！」

「一年、防具付けろ！ やられるぞ！」

剣道場内は戦場と化していた。

「すげえわ……下手なプロの試合より緊迫感ある……」

「新聞部の人、逃げてください！ 危ないです！」

「ああ？ 危険を冒してこそそのスクープだろが。俺はね、新聞部入部した時から記事の為に命を捧げる覚悟よ。いや嘘だけど、俺のキヤリア一年そこらの記者魂が今轟々と燃え上がってるわけよ。ここで引けるかって話——」

「危ない！」

何時の間にか俺のいる扉側に接近していた山田。その上段打ちを、間一髪で一年が食い止めた。

「し、竹刀だって当たれば耳ぐらいは削げますよ……！ 素人は退かって下さい！」

「グルルルル……」

俺は一年の忠告通りに剣道場から撤退したが、あの時面越しに見た山田の顔はマジでヒトのものじゃなかった。ああそうさ、俺はあん時ションベンもうんこも漏らしたよ。惨めに家に逃げ帰ったけどさ、俺の母さんは特に何も言わなかったぜ。慣れてるからな。

高校の頃。 2

まだこの話の続きを聞きたいってか？ ションベンもうんこも漏らしたんだからもういいだろ？

うーん、しょうがねーな。

俺は後日、山田に直接事情を聞きにいった。山田は隣の六組だったからな。

「おう山田」

「なに君……僕になんか用？」

山田は卓球部所属のようなひょろい外見の男だ。昨日見たアレとのギャップが既に俺の中でヤバイ。密かに足がガクガクしてきたが、健気に平静を装って俺は続ける。

「とりあえずよ、あの後どうなったか教えてくんね？ 俺なんつーか普通にうんことか漏らして帰ったからさ」

「ああ……。あの後、小宮君に止めてもらったよ」

うんこに触れる気はないようだった。

「小宮ってあの一年か？」

「うん。僕、竹刀弾かれて……。その後、他のみんなに取り押さえられたよ」

あの可愛い一年坊が、怪物と化した山田を圧倒した。その事実俺の下半身は微かに反応したのだが、あの頃の俺はその感情を理解するにはまだ幼すぎた。

「マジでゲイだろ君」

「……はっ！？」

「そっという顔……してた」

そう言っ
て少し逸らした山田の繊細な表情を俺は今でもよく憶えているし、たまにオカズにする。

高校の頃。 3

この話まだ聞きたいってか……。
弱ったな。

「あの、先輩。何で僕と山田先輩呼び出してわざわざこんな話聞かせるんですか？」

「僕と小宮君にゲイ告白したかっただけなんだから君は」

「え、今の話って山田君と小宮君のことだったの？」

「押野さんにも……なんていうか、聞かせる魂胆だったんだろ……。自分の……も、漏らしたとかの話……。最低だよこいつ……」

山田から話を聞くにつれてわかってきたのが、普段大人しい彼が内に秘めた異常な闘争心の存在だった。

「竹刀を持つとき、つまり……戦わなきゃいけないだろ。相手を倒さなきゃいけないんだ。でも、こうして話す時は、そういう心は必要ない……。僕は不器用で……その使い分けができないんだ」

「ああー、お前アスペだろ」

「コラーツー!!」

その掛け声と共に俺の頭に衝撃が走った。それが六組のマドンナ、押野舞との出会いだった。

女に殴られるなんて初めてだった俺は、やはり今でもその時のことをよくオカズにする。

ゴスン！

「痛っ……！」

「押野さん落ち着いて！」

「悪気はないんだよこの人！」

「嘘つけ！ 悪意全開じゃないこいつ！ ていうかあんたら二人、セリフだけでも区別つくようにしなさいよ！」

「ええっ、僕達！？」

「とばっちりでですよ！」

「丸山！ なんなのこの話！？ この続きもこの場の全員知ってるんだけど！？」

「押野……マジで気持ちいいからやめてくれ、殴るの」

「殺していいかな……！！？」

「お、押野さんナイフ、フォーク！ おさめて下さい！ 周りの客が見てますって！」

「押野さん、ハンバーグラUNCHもすぐ来ますから、落ち着いて！」

「何そのフォロー！ 私が料理待ちきれないで暴れてるみたいだし

！ 相変わらず双子みたいだしあんたら！ どっちか一人帰ったら！？」

「「帰っていいなら帰りたいですよ！」」

高校の頃。 4（前書き）

書く練習です。許して下さい。

高校の頃。 4

「あのな、誰がお前らに向かって話してるって言った？」

「はっ!？」

「いや別に霊的な五人目がここにいるとかじゃない」

「押野さん、そんな慌てて背後振り向かなくても」

「ば、馬鹿にしてる？ 丸山もそうだけど、実は小宮君も私のこと馬鹿にしてるでしょ!？」

「ちょ……」

「なるべく声大きく話してさ、周りのお客さんにも聞かせてるんだろ……こいつ」

「山田、半分正解。もう半分はこれだ」

ゴトン

「あ、ICレコーダー……?」

「俺の記者魂舐めんなよ。この話、どつかの新聞社に持ち込んでやる。証人であるお前らのコメント付きでな」

「丸山先輩って大学でも似たことやってるんですか？」

「いや、普通にサークルとか無所属」

「友達いないよ、こいつ」

「よくわかんないけどさ、そういうのって使い方次第なんじゃないの」

押野は俺の説明を聞いて、よくわかんないと言いつつもそれらしい策を出してきた。

「いや正直山田のことなんていいから俺と付き合わないか押野」

「なに口説いてんだよ……」

「山田君が竹刀を離さないで暴れるならさ、例えば私とそのカメ

ラマンで一試合ごとに押さえつければ大会に出せる」

「すごい無視だな」

「押野さんまたえらくぶっ飛んだアイデアを……」

押野舞は常に商売の観点、損得の観点から物事を見ているセコい女だった。

余談だが、後々の調べで判明した押野の男性遍歴も酷いものだった。当時高二の時点で既に十人。いずれも部活動成績や学力面で将来有望なイケメンのみだった。

俺はそいつらと押野の夜の、又は日も落ちない時刻から繰り広げられる十代の未成熟な性行為を想像してオナった。それが俺の高校三年間の全てだった。

ガッシャン！

「お、押野さん！」

「それ私の前で話すこと！？　ねえ、それさ！　こんなファミレスとかで話すこと！？　録音すること！？」

「押野さんマジ切れ……！　フィクションでしょ一応！　この話全体が！」

「落ちちけ押野、涙を拭け。お前、記憶障害も起こしてる。お前のこのファミレスでの反応と、俺の回想が矛盾している」

「言わなきゃいいのに……丸山先輩……」

「それ、あんたの話運びが下手なだけでしょ！」

「お乳けには突っ込まないんだ……明らかに故意のセクハラなのに……」

高校の頃。 5

山田はあの騒動依頼、剣道場端で別メニュー練習を強いられていた。

俺と押野は放課後になると欠かさずそこへ行き、山田を剣道部の戦力としてモノにするボランティアに勤しんでいた。

「山田なにやってんだ」

「何って、見りゃわかるだろ。筋トレ……。あの日以前は稽古で竹刀持っても平気だったのに、試合形式でさ、他校の相手前にしたら、倒さなきゃ……。倒さなきゃ……。って」

「マジビョーキだな。エヴァとかの見過ぎじゃないか」

「ほらっ、パクってきたよ。竹刀」

押野がどこから持ってきた竹刀を放った。

「えっ、えっ……。いいの？ 僕、竹刀持って……」

「なんでキョドるの？」

「こいつビョーキなんだよ」

「私は丸山の方が人格障害に見えるけど。なんていうか、モラハラ」

「はあっ！？ なな、なんつつかな！ お前だつてな！」

「そのリアクションがもうね……。本音を言うと、常に三メートルは距離をとりたい」

「押野……。お前の男癖の悪さ、いつか公にしてやるからな……」

だがそう言いつつも俺は、隠し撮りした押野の写真と歴代彼氏の写真を並べて部屋で妄想する行為を、もう少しだけ自分一人のものとして楽しみたかった。

「ふふ……。押野お前、俺の脳内ですごい事になってるぞ……。でも現実はそのと大差ないか、若しくはそれ以上なんだろ……。俺はなんだか泣けてきたよ……。」「持つてる……」

「は？」

「山田君、竹刀持つてるけど」

次の瞬間、俺と押野の間を疾風の如き突きが駆け抜けた。

俺は例の如く腰を抜かして転び、押野は目ん玉ひん剥いて凝視しながら三メートル後ろに飛び退く。

力が抜けたように落ちていく竹刀の先端が、カツンと床に音を立てる。逆端の握り手は山田の手の中だ。

「何コレ！？ 何！？」

「だから言ったる……」

「グルルル……」

「ビョーキとかのレベルじゃないってこれ！」

面の奥の山田の形相を見て言ってる。目はつり上がって歯は剥き出しの、ギャグと紙一重の緊迫感がそこにはある。

「しかも何で！？ 何で丸山無視して私に向かってくるの！？」

山田は前進。ついた竹刀の先端で床を削り取るような形の前進。俺の真横を通って、真っ直ぐ押野に向かった。

どういうことだ……

「いやっ！」

目にもとまらぬ速さで、下ろされていた竹刀が横に振られた。咄嗟にしゃがんで避けた押野の頭上の空間をそれは一切の迷いもなく切断する。

俺は気づく。武士道か？ と。

「押野！ 戦意のある奴に向かっているんだ！ 屈服を示せば何もされない！ 漏らせ！ うんこも何もかも漏らしてしまえ！」

「やだよぶざけんな！」

尚も虚勢を張る地べたの押野に、山田の竹刀がゆっくりと振り上げられる。決定的瞬間を逃すまいと、俺はカメラを構えた。

「最低……丸山……」

「で、その後どうなったんだっけ？ あっ、この高そうなピザ追加で」

「かしこまりました」

追加オーダーを入力してウェイトレスが下がっていく。ソファ―席に一人座る俺の向かいには、食事に夢中の三人。

何だ……俺が払うのか……？

押野は馬鹿みたいに追加で頼みまくってるし……

俺が払うのか……！？

「そっだよ」

高校の頃。 5（後書き）

どうしようこれ……（笑）

高校の頃。 6 (前書き)

ひどくてゴメンナサイ……

高校の頃。 6

シャッターを切るのが早かったか、“それ”が早かったか、俺の身体は次の瞬間、構えていたカメラに何かの直撃を受けて大きく吹き飛んだ。

「うつ……！」

レンズの部分に竹刀が突き刺さっていた。

場内向こう端から走り込んできた一年の小宮が、間一髪で山田の竹刀を弾き飛ばし、押野の窮地を救っていたのだ。

息を切らして小宮は言う。

「その新聞部の人、最低ですよ」

「最低……」

「僕も最低だと思う」

何故元凶である山田にまで言われるのかよくわからなかったが、俺はとりあえず形だけでもシヨンボリしておくことにした。

一時騒然とした剣道場内もまた元の練習風景に戻り、ホツとしたもつつかの間。俺と山田と押野の三人は、部長を名乗る三年生によつて外に放り出されていた。

「一応……良かったよ。学校敷地外周ランニング命じられて……」

「一応部活できてさ」

「部活って言えるのか外周ランニングが……」

もうバテ気味の俺の少し先を、山田と押野が並んで走る。

「丸山の言う通り、“剣道部の”部活ではないよね。それこそ陸上に転向したら？」

山田は俯いて、それでも走るスピードは落とさなかったが、聞こえるか聞こえないかぐらいで呟く。

「剣道が……好きなんだよ」

「「うわぁ……」」

俺と押野が声を揃えた。

「ところで、あの一年の子は何なの？ ひょっとしてめっちゃ強いんじゃないの……？」

ああ、小宮ね。

「小宮くん、強いよ。丸山くんはもう知ってると思うけど、部で一番強い」

だよな……。竹刀を弾いた瞬間は一度も見えてないが、単純に考えて暴走した山田を二度も鎮圧した事実がある。

「けど、身体が小さいし、持続力がない。彼を試合で使うには一試合が限界だよ」

「え？ なんで偉そうなの？」

少ししたり顔をして言い切った山田の顔を、押野が執拗に覗き込む。

「なんで今偉そうだったの？」

そういうツツコミって結構堪えるぞ……。まあ俺も、お前は監督かよって思ったけど。

「山田くんて大学で彼女はできたの？ ハツカノは」

俺の回想なんて一切聞いちゃいない。押野の恐らく無自覚な悪意のない質問に、クリームソーダを吸っていた山田が少し嘔き出し咳き込んだ。

「で、できてないよ……。そんなの作る暇がないっていつか」

「暇があれば作れるの？」

「えっ……」

「なんか選ぶ側視点じゃなかった？ 今」

だからそういつの堪えるって……。

高校の頃。 6（後書き）

暑くなってきました。

熱中症に注意してください。

高校の頃。 7（前書き）

実質連載三つ抱えたような状態……

借金がエスカレートする人のようです。

ごめんなさい、がんばります。

こうやって滅茶苦茶やって、ひどい有様ですけど、せめてせめて自分の足しにしたいです。

高校の頃。 7

「あのな」

ウチはど田舎の高校だから、下校時に寄れる店と言ったら、自転車で三十分の距離にあるこのファミレスが最も近い。けどな、こっつて俺の家からしたら全くの逆方面なんだよ。

十六時過ぎ、微妙な時間帯の客層もまた奇妙なもので、殆どが俺らと同じく学校帰りの学生。同校の不良グループだったり、他校の生徒なんてのもいる。西校だな。つうか、この店つてむしろ西校の方に近い。

窓側のテーブル席、奥から小宮、山田、押野の順で並ぶ。俺はといえばその向かいに一人だ。この不自然な席順は、押野舞が俺の隣に座ればさりと解決する問題なのだが、

「やだよ、お前の隣なんか」

数日前に初対面だった女子がこうも早く碎けてきたか。本音を言い合えるっていいな。

「丸山先輩泣きそうじゃないですか？」

「いいよ、本題に入ろう」

押野は俺をまさにいないものとして、存在に触れなかった小宮を制して切り出した。

押野がこの面子を半ば無理矢理に誘ってこの場に集めたのは、暴れ竜である山田を有効に運用して我が校の剣道部を大会で勝たせる提案の為だ。

俺は、“嘘だろう”と思う。色々とな。

「狙うのは当然、次の県大会。三年はもう引退で、まず小宮くん、あとはどっこいどっこの二年が主力となる。勝ち抜き戦では、傍から見た印象で絶対に勝てない」

間違いない。三年はまだともかく、あの二年連中は去勢された犬も同然だった。あの時暴走した山田から逃げ回る様は、フレームに

収める価値もなかった。それもこれも……

俺は、出されたお冷を両手持ちしてすする小宮に視線をやる。外見……実年齢よりも幼く見えるそれは、あの正統な実力とのギャップに拍車をかけている。自身の存在が二年から戦意を奪っていたなどとはつゆ知らず、そんな顔だ。

元々のヘタレ連中が外的状況で更にヘタレ加速しただけのこと、俺を含めて誰もなんとも思いはしないことだが、それによつて団体戦のみが執り行われる県大会での勝ち見込みは更に薄まった。

「でも、そこで山田くんを上手く使えば……」

押野はそこまで言つて、隣の山田を自信に満ちた眼差しで見つめる。山田は正面、テーブルに視線を落としたまま硬直した。困惑してる。押野はこいつに対して褒めるか貶すか統一しろよ。

「つか、そもそもが嘘だろ。お前に何の得があつてこんなこと……」「な、なんでそこまでしてくれるの……」

俺の疑問はそのままの形で山田の口から発せられた。

「押野さん、僕は剣道部にいられるだけで割と幸せなんだよ」

「竹刀握れなくても？」

どつという形であれ、押野は下から覗き込むように責めるのが山田のようなヘニヤチンへの接し方らしかった。

沈黙する山田に、今度は小宮が言う。

「竹刀を持った時の山田先輩、僕は何度かお相手させて頂きました
が」

事故でな。

「良くも悪くも生き生きしていました。……決して良くはないし、悪い質のものなのは間違いないんですが、剣道を好きな者の太刀筋を感じました」

さり気なく悪質つて言つてるが、間違つてない。確かにどこかで捻じ曲がっちゃいるが、山田はそこの誰よりも純粹で、真っ直ぐに剣道に触れている奴だろう。

「あのね、山田くん」

横から睨むような形のままの押野が口を開いた。

「私があなたの為に色々やってるって勘違いしてるみたいだけど」
違うのか……。自己本位のヤリマンの癖に似合わないことやっていると思ったが。

「例えば完成間近のパズルがさ、あと三ピースぐらいだったら、丸山どうする？」

なっ……。急に俺に振るなよ。変な返ししかできないぞ。

「は、はめるだろそりゃ」

……。しまった、もっと捻ればよかったか？

だが、押野は俺を鋭く見たまま、不敵に笑った。

「ほら、丸山だってそうする。通りすがりにパズルを完成させる行為、報酬も何もなかったって、それだけで価値がある。誰だってやりたがることだよ」

俺は、悔しいが少し息をのんだ。この女は無自覚にいいことも言う。小宮は彼女を羨望の眼差しで見つめ、山田は感涙でもしたのか、俯いてしきりに鼻をすすり出した。

「……商売をしようと思ったらね、この感覚がとにかく大事なのよ。偶然揃った駒、蓄積されたウマイ状況に、ラストの数ピースを加えるみたいな感覚が……」

彼女が両手振りで話す商売論なぞ、誰も聞いてはいなかった。

高校の頃。 7（後書き）

ずっと今が2012年だと思っていました。

高校の頃。 8（前書き）

これを読んでしまったあなたがどうか幸せでありますように。

高校の頃。 8

「それで――」

押野が続けて何かを言おうとしたその時、店内奥で椅子が乱暴に倒れる音がした。続けざまに複数の激しい罵声が飛ぶ。俺が遅れて目をやった先では、次々に椅子から立ち上がり移動する不良グループ、向かう先は西校生徒集団が座る窓際奥。猿でもわかる程の明確ないざこざ風景が目の前に展開していた。

押野達三人も、後ろのそれに振り向く。

「何……？」

「西校ですよね、あれ」

ただの不良の小競り合いなんて記録に収めるまでもないと思うが、一応……

と、鞆に手を突っ込んだ俺だったが、つい失念していた。新聞部の備品であるカメラはあの時破壊されて修理中だ。当然修理代は部費でな。遊びの部活にマネー一銭も出すもんかよ。

「オラ西校！」

「立てや！」

そうこうしてるうちに騒ぎが加速していく。

ウチの不良グループは、相手が西校つてだけで突っかかるような性質の連中だ。田舎校だからな。しかし、今のこれは恐らく、西校の奴らにも何か非があったと見える。俺たちが入店してからの数十分は、店内の空気は比較的穏やかだったからだ。不良連中もただダベってるだけという様子だったし、何より西校の面子がパツと見不良とは言い難い風貌をしていた。

ここ数秒の間に一体何が起こった……？

「てんちよおー……」

学生バイトと思われるウェイトレスが泣きそうな声を出しながら厨房内に引っ込み、すぐにそこから責任者らしい強面の男がずかず

かと現れた。が、偶然同時に飛んだ不良の一際激しい罵声に彼はビクつき、強面のまま足を止めた。

「おいおい、役立たねーな……」

俺は呟く。

と、店内奥に群がる不良グループの騒ぎ声が突然変質した。ざわざわと、一瞬、それが悲鳴に近く聞こえたかと思ったその時、

「ぎゃー！」

ぎゃー！ という叫びも今時どうかと思うが、それより何だ、目の錯覚か……？ 今、グループの中でも一番の大男が宙を舞って、テーブルを二つ越えたような気が……

「うそ……」

みるみるうちに驚愕に見開いていく押野の目、それは、厨房前に設置されたドリンクバーに大男が衝突する音と同時に伏せられた。

明らかに変形し、注水口からミックスされた飲料を吐き出すドリンクバーシステムの姿、何より人が数メートル軽く吹き飛んだというシンプルな事実に驚きながらも、俺は店内奥席へと視線を戻す。

囲っていた不良グループの輪、大男が欠けたことによる穴。そこからそろそろと顔を出す濡れた土色の剣先。

……木刀だ。

「う……あぎゃわー！」

素で聞くなら阿呆になったとしか思えないような声が聞こえたかと思えば、その阿呆声の主は例の如く店内低い天井の下を吹き飛んで、俺たちのテーブルまで挨拶にやって来た。

「……って」

「伏せてっ！」

鈍重な衝撃音と同時に、俺の目の前で四人分のお冷のブロック氷とガラス片が舞い上がった。吹き飛んできた不良はテーブルを跳ね転げ、咄嗟にソファ一席にずり下がった俺の顔面スレスレを通過した。

後ろの方で、恐らく入店ドアに彼がぶつかる音がしたが、俺は決

して振り返らずに、いや振り返れずに、恐る恐るテーブルから出した顔で、事の現場の様子を注視する。

ゆらゆらと席から立ち上がる木刀の主。眼鏡で短髪、西校指定の学ランを襟ホックまでキチンととめた、優等生風の男。片手に握られた木刀。

それを見た押野がハツと言う。

「あれは——妖刀『イシマキ』……！」

よ、妖刀？ すまん、正直そんなの出していいのか……？ 俺の心配を他所に、禍々しい顔のまま押野は続ける。

「……幾百の年の中で最も負の気が高まる年数、樹齢百七十二年の校木から削り出し、西校剣道部によって代々受け継がれてきた、手にした者は鬼の力を得ると共に自我を失うという呪いの刀……」

「押野さん適当なこと言わないで下さい」

高校の頃。 9

総勢五名いた不良グループ最後の一人が打ち倒され、ファミレス内の硬い床に倒れこむ音を聞いた時、俺たち四人は席から立ち上がり――遅すぎる……今更立ち上がって警戒しつつ後ずさるなんて、あまりに……！

「妖刀って話は……」

「デタラメよ」

じゃあ何だ、あの眼鏡の彼も、刀を持つと人が変わってしまう系の病に侵されているのか？

薄い血を滴らせた木刀が、ゆらりと空を惑わす。眼鏡の奥の眼光は異様に鋭く、俺を射抜く。

「つて、俺……俺かよ……！俺を見てるぞあいつ……」

明らかに降参の姿勢をとっていた不良にも、あの木刀は容赦なく振るわれた。奴に山田のような武士道精神は存在していないものに見える。

「恨むならそこに倒れている不良共を恨め。俺を焚きつけたのはそいつらだ」

眼鏡は言った、が、なんだこの口調は……。声質か……？ノイズ混じりの、人の発声器官から出るような声じゃない。

奴との距離は四メートルはある。直進ならその間にソファ―客席が三つ邪魔をする。振り返って全力で走れば逃げられるはずだ……逃げられるはず……いや、自信なくなってきた……。

この四角い店内、例えばドアを開ける手間でもいい。逃げようと思えば、何かしらがロスを招く。四人一斉にあの狭い入店ドアから逃げれるか？……無理だ。

牢屋じゃないのか、ここは。そう錯覚すらしてくる。そしてこの狭隘な空間で俺たちの目の前にいるのは、鬼だ。

ふと、店奥のテーブルにつく奴以外の西校生徒の姿が目に入る。

ポテト一皿だけを注文し、それを三人で摘みながら、テーブルに広げた参考書類を凝視、又はノートにそれを書き写す者。

「な……なんだ……。まさか受験勉強……。まさか奴は、それを邪魔されたっただけで……」

「丸山さん！」

ガタン！ と、テーブルが強く跳ねる音がした。眼鏡の男は土足でテーブルの上を進行、次々に蹴り跳ね、俺たち、いや、俺の目前に最短で接近――

その攻撃を、間に入った小宮が竹刀袋に入れたままの竹刀で受け止めた。

「いつもいつも丸山さん！ いい加減にしてっと思うけど……すいませんこれは流石に不可抗力ですね……！ 失礼しました」

「謝ってる場合かよ！ 押されてるぞ！」

「早く弾いて小宮くん！」

弾いてと押野に言われ相手を睨む小宮だが、その表情は徐々に曇り始める。短髪の彼の広い額を幾本もの汗が伝う。

「ざ……残念……！ 技量でどうにかなる相手じゃないです……！」

小宮が次に上げた「あっ」という間抜けな声と共に、俺たちの目の前で、逆に弾かれた竹刀が宙を舞った。小宮という防波堤は、無残にも決壊。

「オイオイオイオイ！」

「嘘だろ！」

「うあっ……！」

慌てて逃げようとした押野が椅子脚につまづき転倒する。

「につ、逃げて！ マジでやばいです！ しかも木刀、下手すりゃ死にます！」

「わかってるそんなの！」

俺たちは一斉に、腰を抜かし地を履いながら、倒れた椅子、転がったグラスを蹴散らして、全力で逃走を図った。

しかし、まさにパニック映画の様相。奴の一步は、必死のあまり

地を滑るような被食者のそれよりも素早く、確實。四つん這い、亀の歩みの押野の背中を狙って、奴は木刀を振り上げる。

せ、背中……それはまずい気がする。流石の俺も戦慄した。俺じやなくてよかったなんて低俗な感情を押し殺した。

「丸山、もう誰も聞いてくない？ その話」

「すいませんポテト一皿」

「かしこまりました」

高校の頃。 9（後書き）

これを見てくださる方がいることに本当に驚きです。
こんなのに付き合っ頂いて本当にありがとうございます。

「う……っ！」

俺は反射的に目を瞑った。が……

その後数秒の、まるで時が止まったような静寂に不信を抱き、恐る恐る目を開けた。

押野の小さな背の上で、振り下ろされた木刀はピタリと止まっていた。刀身を目で辿った先には、その先端を握る何者かの手。

山田だ。ここ数分存在が希薄だった山田が、またもや押野の窮地を救っていた。

素手で木刀を受け止めた……いや、それは同時に握ったことを意味する。

受けた痛みの為かプルプル震えていたその手は、徐々に硬く握られ、苦痛に顰めたその顔は、俺の目の前で……俺の目の前で、その形相を怪物のものへと変貌させた。

流石に毎度律儀に糞漏らしするのも芸がないというか、余りに程度が低いと思い自重したが、目前三十センチに満たない距離、しかも今回は面なし生で起こったホラー現象に、俺はもう涙目だった。

アメコミダークヒーローの仮面のような凶悪デザインを地顔でやる山田は、ゆっくりともう片方の手について立ち上がる。彼と木刀で繋がれた眼鏡の男も、それに合わせて一步身を引いた。木刀は――よく見ればとんでもない微振動を起こしている。両者の力の完全な均衡、この距離の俺しか気づかない些細なことだが、それが意味するのは、均衡が解かれた際の激戦の凄まじさだ。

「い、いまのうち……押野逃げるぞ……」

俺はへっぴり腰で前に進む。

「まって……」

押野もそれに続き、

「暴れ竜と鬼です……！ 巻き込まれたら死にますよ……！」

先にいた小宮に手を取られながら、とりあえずの危険領域を脱した。

俺が振り返ると同時に、ミシミシという異常音が店内を支配した。両者に両端で握られた木刀、その中点には当然ながら負荷が発生し、今まさに真つ二つに折れまいとするとところだった。

力の方向を捻って積極的に負荷を与えているのは山田。白目を剥いて舌を上に出し、自身の鼻頭を舐めようと必死に動かすその顔はもう完全にアウトだ。対して眼鏡はポーカーフェイス。

酷い落ち着きようだ、武器を破壊されようとしているのに。山田と同じ性質だというのなら、なぜ奴だけ平静を保っていられる……。

「鬼か……？」

俺は思い当たったままに呟いた。すると横の小宮がささやかな称賛を横目で送る。

「丸山さん鋭いですね。鬼は元来、人を凌駕する程の高い知能で知られている。あの人が自我を保てるのはそういう理由でしょう」

「あの、そもそも鬼って私が適当に言ったことなんだけど……二人とも乗ってくれるのは嬉しいんだけど……」

押野が意味のわからないことを言ったその時、西校伝統である木刀が遂に折れ、二つに分かれた。眼鏡と山田、双方の手に……。

間を置かず、二人は激しい打ち合いを開始した。

「力に加え知能があるというのは厄介です。暴走する力だけの山田先輩に勝ち目はありません」

そのはず……。短刀は特に技術が重視される。

「そこでこれです」

小宮はそう言って、ドア前に転がっていた自身の竹刀を持ち、俺たちの前に提示した。

「これを山田先輩に渡すことができれば……」

「ちよつと待て、誰がやるんだ」

短刀での打ち合いは更に激化していた。互いに一步も引かず、それは、身体を乗っ取った竜と鬼の太古の争いの延長であるかのよう

に。

プロの戦いに素人が……いや、神の戦いに人が手を出すようなもんだ。ちよつと竹刀渡すだけ？ 竹刀も何もかも吹き飛ばイメージしか湧かない。俺はやらないぞ……

「当然、僕がやります」

はっ？ 格好いいけど、そんなんで今更格好つくと思うなよ。一話で俺が脱糞した時点で色んな意味で終わってんだよこの話は。

「ただ、もし僕が渡し損ねた場合、できれば丸山さんが……」

小宮は俺を、次にちらりと押野の方を見る。

「無理なら、押野さんを連れて逃げて下さい。僕のこれは、ただの剣道部としての責任なので」

「ただけ紳士なんだこいつは……。
「ただの責任なんだろ？ それに命かける？ お前の理屈は狂ってるぞ……」

「そんなもんですみんな。山田先輩も」

「だいたい押野は瞬間三メートルの回避行動がとれる……」

「何それ、人じゃなくない？」

すると小宮は少し呆れたように、溜息をついてから言った。

「押野さんは女性ですよ」

軽蔑に近い眼差しがあった。

俺は、それを直視することができなかった。

小宮は竹刀を袋から抜き出して、ゆっくりと立ち上がる。

「では、後のことは頼みます。僕が万一失敗して怪我を負っても、決して助けにきたりはしないように……」

「待てよ」

俺はそれを引き止めていた。

二人の視線が俺に集中する。

「……俺がまず行く……。もし駄目だったら次に小宮が行け」
竹刀を強引に掴んで、奪い取った。

「小宮も駄目なら……押野……お前が行け」

「え……」

俺は、ただ天邪鬼なだけだ。

でもな、ずっとそれで上手くやってきたんだよ。基本は逃げ腰な俺だがな、周囲に反抗する形でなら、俺にだって敵に向かって行くことはできるんだ。

「事を間近で見えて目に焼き付けねーと、いい記事書けねーだろ……」

俺はブツブツ呟きながら、店内中央に発生した嵐のようなバトルフィールドに向かった。

「小宮くん……乗せるの上手いね」

「どうも」

高校の頃。 10（後書き）

作者の暴走ハプニングで始まったお話ですが、気楽に書くというのは成功している気がします。

書き方も二転三転……何書いてもどう書いても低レベルなのは変わりませんが、あまりに適当すぎ申し訳ないです……。

毎度ありがとうございます。

幽霊

先日、交通事故で幽霊になった僕が、クラスメイトの葉山美由さんに生前の感謝の気持ちを伝えるにはどうすればいいのだろう。

僕は葉山さんに触れることも、言葉を交わすことすらもできない。

「その葉山さん、お前の彼女だったのか？ 違うよな」

「まともに話したこともない」

僕のその発言に、ここでの友人、石川は夕焼けの空に浮遊する身体で派手にずっこけた。

「でも、僕の事故現場に花を添えにきてくれたんだ」

「それ生前じゃないな」

「生きていた頃も色々あったよ。朝、教室で会ったら挨拶してくれ、たし、一時期は隣の席でね、落とした消しゴム拾ってくれたりとか、掃除の時は僕の分のほうきを取ってくれたりとか」

「浅田」

石川は僕の肩に手を置いて、憐れむような顔をした。

「それ多分、誰にでもやってる」

「う、うん。でも、それでも僕は嬉しかったんだ。僕、友達いないしさ。あつ、石川は友達だよ」

「俺かよ」

石川は迷惑そうな顔をした。僕は目を閉じて、彼女のことを思い浮かべて言う。

「一挙一動が優しいんだよね……」

「……」

今、無言になった石川がどんな顔をしているか、大体想像がつく。呆れ返っているか、それかまたずっこけているか。

流石に今の発言は自分でも少し恥ずかしく、僕はじわじわと目を開けた。石川は真剣な眼差しで、二十メートル下の地上を見下ろし

ていた。

「あの、チャリ乗ってる子」

「葉山さんだ……！」

制服姿の葉山さんは、学校前の坂道を下っていく。それが交差点に差し掛かるところで僕はヒヤツとした。

「事故現場」

石川が言った。

僕が下校時に坂道の勢いのまま飛び出してトラックと衝突した場所だ。幸い———というか当然、葉山さんは白線で一旦停止をして安全に交差点を通過した。

僕は安堵の溜息をつく。

「……あの日、僕、補習授業受けて帰りが遅くなって、そしたら委員会と同じく遅かった葉山さんと駐輪場で一緒になってさ、向こうは挨拶してくるし……、なんか、ひよつとして、並んで帰ることになるんじゃないかって、そう考えたら恥ずかしくなって……」

「……恥ずかしくなったのはこっちだよ」

「それで僕は、彼女から逃げるみたいに駐輪場を出て、学校前の坂道を飛ばしたんだ。……うっかりしてて……交差点に出た瞬間、全身がバツンってなって……気付いたらここに浮いてて……」

「それ、お前、あの子のせいで死んだようなもんだな」

軽い口調で石川は言う。僕の胸は少しざわついた。

「……葉山さんもそう感じているかもしれない。だから、違うんだよって言っただけだよ」

「思い込み」

石川の言葉が音を切り取ったように、その時僕たちのいる空が静寂した。

「あの子、お前のことなんか忘れてるよ。今日は交差点に花添えないで通過したろ」

「それでも」

「お前は何かしら理由つけて話がしたいだけだろ」

「ありがとって言いたただけだよ！」

僕は声を荒らげた。しかし、眼下の街の音は変わらず、人は歩く。電線の鳥たちは行儀良く留まって、動き出す気配はない。

石川の表情だけが、少し曇る。

「幽霊の声は現世の人には届かないし、仮に届いたとして、あの子は幽霊から告られて一体どうしろっていうんだ？」

「こ、告るんじゃないよ」

「一緒だろ。困るだけだ」

「……」

困る……そう言われて、僕は何も言い返せなかった。

「お前の言う感謝って、結局は自己満足だろ。向こうはもうお前のこと死んだものとして認識してんだから」

「わ、わかんないだろ。もしかしたら」

僕は思わず言葉を止めた。石川の表情が、普段からは伺えないような敵しいものになっていたからだ。

僕は睨み返した。もう意地だった。だって僕には、現世での楽しかったことなんてそれぐらいしかないんだから。

睨み合いが数秒続いて、折れたのは石川だった。力を抜いて、息をつく。少し意外に思った僕の前で、石川は穏やかな表情で言った。

「あの子と話す方法、実は一つだけある」

「な、なに……？」

僕はすぐに食いついた。内心、期待していたんだ。石川が僕の意思を探るみたいにして、この話を途中で切らなかったのは、彼が何かいい方法を知っているからだって。僕の想いを見定めて、それを教えてくれようとしてるんだって。

「どうやって……？」

わかりやすく態度を変えた僕に、石川は穏やかな顔のまま言った。

「あの子が死んで、幽霊になればいい」

突然の夕風が吹いて、電線の鳥たちは一斉に飛び立った。

僕は、石川の顔を見たまま固まっていた。ようやく、はっと気づ

いて視線を下ろし、葉山さんの姿を探す。学校近辺の住宅地を抜けて大通りに入るところに、彼女の姿はあった。

「交通量が多く、チャリで登下校する生徒の横スレスレを大型バスが追い抜くような場所」

石川は僕がわかつていることを敢えて言う。

日没しかけの空で、僕は何も言わずにじっと考えていた。だけど、その時生まれた僕の考えは、どれも自分本位のものでしかなかった。ただ伝えたいだけという我儘だった。それを押し通すか、それとも押し込めるか、ただそれだけの話だった。

空は次第に、夜に包まれていった。

「未練は消えたみたいだな」

俯いていた僕に、石川が声をかけた。

「じゃあ行くか、浅田良」

「……うん」

石川は黒の装束を大きくはためかせた。

僕は彼の後に付いて、月が出ているのと反対側の夜空に昇っていく。

雲の切れ間からは、星のない完全な暗黒が覗いていた。石川によると、僕はあそこで現世の記憶を奪われて、葉山さんのことも全部忘れてしまつらしい。

僕は最期に振り返って、遠くなっていく夜の街を見た。あのどこかにいる葉山さんに向けて、僕は心の中で呟いた。

ありがとう……、さようなら。

幽霊（後書き）

私は、感謝の言葉が過剰になってしまっていることがあります。それを恐れて今度は言葉足らずになってしまうこともまた悩みです。

なかなか言えない時もあるけど、ありがとうという気持ちはずっとあるんです。

ディベート

概要——日川家の五人兄妹である俺達は、死んだ親父の財産分与の件で富山県郊外にある実家に集まった。

「この家族会議は亡き父に代わって長兄である俺、火炉斗が取り仕切る」

ちやぶ台を囲む俺達五兄妹の元に、母、土香がお茶を持ってやって来た。一人一人の前にそれを配り始める。

「まず議題は」

「世界平和について」

金美が手を上げた。この妹は優しすぎてとにかく脱線する。

「財産分与の件が終わった後でだ」

「財産とかいらねーし」

水季がぼやく。この弟は冷めすぎていて話にならない。

「いや兄貴、世界平和についてこの際とことん話し合っておくのもいいんじゃないか」

木之助は自信満々に舵を狂わす奴だ。やはり長兄である俺が立て直していく必要が出てくる。

「……」

月子は静観。他人を一人もないがしろにできない彼女は、多数がいる場での発言権を失う。

「親父の遺した遺産は一千万」

「しょぼ」

俺は即座に水季の頬を張った。奴は派手に畳を転がっていき、更に台所のフローリングの上を滑って、母の足元に軽く衝突した。

「なんだよっ！　しょぼいもんはしょぼいんだよ！　事実だろ！」

涙目で言う水季を無視して、俺は続ける。

「父、日川太陽の遺した遺産は一千万。遺言により、半分の五百万は母の元に、残り五百万を俺達で分ける」

そう言つて皆を見回す。すると、こちらを真つ直ぐ見つめる金美と目が合った。

「私はいりません。その……木之助兄さんに多く配分するというのは……駄目でしょうか」

「金美！」

木之助には何か事情があるようだ。

「金美、話してみる。木之助に何故金が必要なのか」

金美は木之助の方にも目を遣りながら「はい」と頷き、恐る恐る続ける。

「とりあえず安心してください火炉兄さん。借金ではありません。ただ木之助兄さんは東京で一人暮らしで、その上低収入で、総合してこの中で最もその……貧しい状態にあるんです」

「なんだおい、デキてんのかよ。兄妹間でデキてんのか。じゃなきゃそこまで事情知つてるのはおかしいよな」

「水季、木之助兄の事情なら私も知つてたよ。男兄弟の皆は割と孤立無援、スタンドアロンって感じのノリだけど、私と金美はマメに皆と連絡取り合うようにしてたんだから」

月子が初めて口を開いて出たその言葉に、台所の水季は黙り込んだ。

「水季、あなたは孤立無援どころか音信不通だったじゃない」

「……だって心配かけたくないと思って……」

水季は子供のような言い訳をした。まあいつものことだ。

そこから視線を戻し、俺は全員に向け声を張る。

「よし、分かった。財産は――」

「おい兄貴、俺は平気だって。普通に暮らしていける」

「財産は五人で等分とする。一人頭、百万」

俺は言い切った。一度言つたことは自分の心変わりも含めてどんな異論も認めない。

兄妹連中の顔を見回すと、食い下がろうとしていた木之助は安堵少し考えて納得した月子。台所の水季は「はっ」と嘲た声を出す。

金美だけが腑に落ちない顔で俺を見つめた。

「情けをかけられて自尊心が傷つくこともある。金美、優しいだけが優しさではない」

金美の目が潤み出した。それでも俺の決定や発言が覆ることはない。

「金美はさあ、そういう偽善に酔ってるだけだろ」

水季の指摘は流石に柔らかかったが、金美はそれに対し鋭く睨んだ。

親父も言っていた。本質的な面でこの二人は反発し合うのだろう。

「木之助、本当に苦しい時は支援させてもらう。それまで頑張れよ」

「お……おう！　ありがとな兄貴」

「では、これにて家族会議を終了する。世界平和については」

俺は金美の顔を見遣った。

「おやつを食べながらにしようか」

母、土香がお茶の継ぎ足しを持ってやってきた。後ろに続く水季はお盆に羊羹を乗せている。

「なんだよ世界平和って」

「やはり末っ子だな水季。母さんの手伝いがよく似合っている」

金美が少し笑った。昼下がりの暖かい日差しの下、縁側からは少し涼しげな風が吹き込む。

「大分過ぎやすくなりましたよ、お父さん」

母が言う傍で、俺は皿の上の羊羹に楊枝を刺す。親父の好きな銘柄だ。そう思いながら一つ、口に運んだ。

THE・殺し屋（前書き）

シンプル2000シリーズ

THE・殺し屋

無駄のない形というものに私は惹かれる。例えば大きな欠点を抱えていてもいい。何かに特化してシンプル、軽量ならば。

今手にしているナイフがまさにそれだ。

「オヤジ、これ幾らになる」

「それかい？ 取り回しは効くけどね、敵を一撃でやるにはブレードが短すぎるよ」

「馬鹿か。幾らになるかを訊いているんだ」

オヤジは睨みながらも指を二本立て、空港前ホテルのハイクラス一泊分に等しい値を示した。

「物の価値を知らないあんたが憐れだ。二倍の値で買おう」

殺し屋である私がこの国に武器を持たず入国した理由は一つ。重いからだ。

例えば携帯電話は今や世界中どこでも繋がるが、それを必要とするのは使われてる連中だけだ。どこにも属さない私には不要。不要な物をわざわざポケットに入れて持ち歩く気にはなれない。

私の所持品はパスポートとクレジットカードのみ。国によっては紙幣が要ることもあるが、それがもし崩れて硬貨が発生すれば全額募金箱に投入する。

スーツもベルトも靴も軽量の物を使用しているが、欲を言うなら常に全裸で行動したい。ナイフすらなくていい。当然、素手で殺す術も心得ている。

だが、今回の任務はスピードが求められる。よって、必要最小限の装備がこのナイフとなる

私は早足で観光客向けの多言語看板がひしめく繁華街を通り抜ける。ナイフは右手に。隠す必要などない。速やかに終わらせる。

正面約十メートル先のエロい店から出て来る黒服集団を確認した。標的は日本の巨大企業の要人だ。この国での行きつけの店が知れていたことで、今回は出現場所と時刻を絞ることができた。当然、向こうも警戒するタイミングだが、速やかな奇襲によってそれを突破する。

私は速度を緩めず、早めることもなく黒服の集団に接近。進行の妨げになる三人に狙いを定め、ナイフで首を掻き切りながらその体間を縫っていく。

集団中央で護られていた中年の要人と対面する。

容易すぎて涙が出る。凄腕の護衛を警戒してナイフを使用したのだが。

「要人なのに不用心な奴だ」

「!？」

彼の横を通り抜けざまに首を掻っ裂いた。そのまま後方護衛の邪魔な三人を同様に処理し、私はエロい店に入店した。

首吊り同好会

僕の高校には『首吊り同好会』というものがある。もうあと一月で卒業というところで、僕は友人からその存在を知らされた。

「それは一体どんな同好会なのか気になるじゃないか」

「だろ」

そんな経緯で僕は、高校最後の一ヶ月を『首吊り同好会』部員として過ごした。以下はその記録だ。

まず期待外れだったのが、旧校舎三階の部室を初めて訪れた際に、部員の誰も首を吊っていなかったこと。

「誰も首吊りしてないじゃないですか。がっかりしました」

僕は入部届をその場で破り捨てようとした。

「いいえ、もう首吊りはしたんです。私達は幽霊なんです」

「そんなわけないでしょ」

僕は軽くキレて部長を名乗る女の胸を触ろうとしたが、掌は虚しく空を切った。

「幽霊がここで何やってるんですか」

「胸を触ろうとしたことをまず謝って下さい」

僕と女は同時に激昂して激しく取っ組み合おうとしたが、互いに掴みどころがなかった。

他の部員は僕達に見向きもせず、テレビゲームに没頭している。

「テレビゲームは没収します」

僕はそう言っただけでゲーム機を持ち上げ、学校の備品のテレビに繋がれているコードをブチブチ引き抜く。部員達が悲鳴を上げた。

「やめて！ やめて下さい！」

止めようとする女に僕は、「じゃあ、おっぱい見せてくださいよ。そしたらやめてあげてもいいですよ」と言った。

すると女は俯き、渋々ブラウスのボタンに手をかける。

「みんな、むこう向いてて……」

「部長！」

「ああ、僕達の部長がそんなこと……」

女は、はだけた胸元から覗かせたブラを羞恥の表情でたくし上げる。よし、これは思った以上の収穫だ。

「おい、お前ずっと誰と話してんだ」

僕は友人のその声に振り返った。友人は「霊でもいたか？」と笑う。「つか、収穫はゲーム機だけか。つまんね。俺帰るわ」

僕はまた部室内に顔を向ける。女部長は涙目になりながらブラウスのボタンを留めていた。

「ああ……帰っていいよ」

僕は背中で友人を見送った。

この後僕は、破り捨てようとして皺くちやになった入部届を伸ばして女部長に渡し、『首吊り同好会』に入部した。

それから一月を『首吊り同好会』部員として過ごし、卒業が迫った頃、僕は本気で首を吊ってずっとここの部員になろうかと考えたが、やめておいた。

結局部長のおっぱいは見れず仕舞いだったが、大学に行って就職した今でも僕はたまに旧校舎の部室に出向き、テレビゲームや部長へのセクハラを楽しんでいる。

シャドウ猫

黒いアメシヨのシャドウ猫は他猫とにかくモテる。猫通り前を闊歩する彼女の後には常々、軟派な声がついて回った。

「シャドウ猫、いつ帰国したの」

「一昨日」

「ケーキ一緒に食おうぜ」

「ケーキは食べる。あんたが不要」

苺のシヨートケーキを食しながらシャドウ猫は、猫通り横の空き地に入る。最奥の土管前では、はっぴい猫とゆうちゃんがしゃがみ込んで地面に描いたマルバツゲームで遊んでいた。

「あ、これ必勝法あるよ」

「言わないで！」

負けそうなゆうちゃんは、シャドウ猫の助言を突っぱねた。

「自力で勝つことに意味がある。大人の真剣勝負に水をささないことだシャドウ猫」

「あんた性格悪いだけでしょ」

縦と斜めの二択を迫り、はっぴい猫は勝負を制した。連敗のゆうちゃんは涙目だった。

十二戦目のマルバツ枠を描きながら、はっぴい猫は言う。

「アメリカはどうだった」

「自由だったよ」

「シャドウ猫の性格ならどこだって自由じゃないんですか？」

ゆうちゃんが首を傾げて訊いた。

「シャドウ猫の自由は相対的なものだ。周囲が窮屈に生きる中で、それだからこそ意味がある。自由の国から半年で帰国した事実が全てを物語っている」

「なるほど」

「好き勝手言わないでよ。内弁慶みたいじゃん」

シャドウ猫はムツとした。やっぱりコイツ嫌い、と思った。

「シャドウ猫って何歳なんですか」

「二歳だ。君より年下だな」

「はっぴい猫は？」

「私は六歳。人間で言くと五十歳だ」

「わあ」

「なんであんたの時だけ人間の歳に換算すんの」

シャドウ猫は言いながら、ゆうちゃんの前に座る。

「シャドウ猫、君が先攻でいい」

シャドウ猫とはっぴい猫のマルバツは当然のように引き分けた。

ゆうちゃんが「おお」と驚く。

「無駄でしょ。四かけ四の十六マスでやろつよ」

その言葉に、はっぴい猫の目が静かに見開いた。一拍置いてから口を開く。

「いいだろう……」

十六マスに増えたマルバツにはっぴい猫は対応できず、翻弄された挙句大敗を喫した。

シャドウ猫は敗者の顔を冷たく見つめた。

「なんか気分悪いね」

生後間もなく捨てられ、はっぴい猫に拾われたシャドウ猫は、二ヶ月の時に彼から不思議な力を継承した。それは孤独なシャドウ猫の拠り所となるように、という彼の親心だったのだが、同じく不思議な猫となったシャドウ猫は次第にはっぴい猫の力の使い方に不信を抱くようになっていた。

「あたしはこの半年色々見て回ってきたんだ。広い世界を知ったらさ、あんたが凄くちっちゃい奴だってわかったよ」

はっぴい猫はシャドウ猫の加虐とも悲哀ともつかない視線を受け止めた。

「そうだな、世界は広い。しかし、一つの物事が深いのも事実だ。君の目には私が一箇所に留まる臆病者に見えるかもしれないが、私

は君とは違った形で世界を探っているんだよ」

そのとき親の顔になったはっぴい猫が、シャドウ猫は堪らなく嫌だった。

「あんたが可哀想だから言ってるのに……」

くすんと声を上げ、シャドウ猫は泣き出してしまった。ゆうちゃんが慌てて背中を撫でて、それは止むことはなかった。

シャドウ猫は悲しかった。飛び立たない彼のが悲しかった。確かなものをなにより一つ得られず猫の短い人生を全うしようとしている彼のことが悲しくて泣いていた。

はっぴい猫はそれをただ真っ直ぐな瞳で見つめていた。

THE・殺し屋2

強制が苦手な者は三流だ。私のように一流の殺し屋はこう対処する。

「スナイパーライフルを使えだ」と

「そうよ。そこの屋上から標的を狙いなさい」

「殺す相手は好きに指定してくれたらいい。但し殺す手段は私自身が決める」

依頼主の女秘書は、ビル五十階、秘書室のブラインドを広げ、下界を見下ろして呟く。

「重たいのが嫌なだけでしょ」

「重たいのが嫌なんじゃない。もし私がスナイパーライフルを悪用してお前とかを撃つたらどうすると心配しているんだ」

「そんな言い訳するほど嫌なのね。わかったわ、指定時刻にそこの屋上に来なさい。スナイパーライフルはそこに用意しておくから」

私は鳥のように生きたいと思っている。その身一つで何処までも羽ばたき、己の力で餌を捕らえる。

「何者にも束縛されることはない」

私は、そこの屋上角縁に固定されたスナイパーライフルのスコップを覗き込む。

「ママあ、わたしもスナイパーライフルやりたい」

「あのお兄ちゃんが終わったからね」

日曜のそこの屋上は親子連れでこった返していた。私は連中の注目を浴びながら、ライフルの位置調整、風向速度測定、着弾地点の最終確認を済ませていく。

プレッシャーに負ける者も三流。それを追い風とする者は二流。一流はどんな時でも揺らがない。確実に標的を撃ち抜く。

スコップサイトに、繁華街中央道を走る黒のリムジンが映り込む。

大手企業の役員の乗る車だ。私はまず一射目で前輪を狙い、車が停止して役員が降車した所を仕留める算段でいた。しかし――
カシユンという音がして、引き金を引いた私の指は余りに空虚な手応えを得た。

「あつ、お兄ちゃん弾切れだろ。やっぱりな。オレさつき五発ぐらい撃ったもん」

私は立ち上がり、その小太りの少年を殴った。

「お兄ちゃん、予備の弾そこにあつたよ。わたしが見つけた」
「すまない」

私は少女からそれを受け取り、急いでライフルに装填する。しかし、標的の車は中央道から逸れ、ビル街を走り街から離れるルートを辿っていた。

まずい。ビル街を抜けられたら完全に射程外だ。あのビル群の間を縫って、一撃で標的に当てるしかない。

私は、ビルが隙間なくひしめき合う中に唯一、進行ルートの車道が見える隙間を発見した。そこをリムジンが横切る一瞬だ。標的が座っている可能性の最も高い最後尾の黒窓に狙いを絞って撃ち込む。

やれるか？ いや、やるのだ。私にはできる。何故なら――

「一流は失敗しないからだ」

空気を叩くような発射音が鳴り渡った。

久方振りに味わった極限の余韻に浸る私に、少女の母親が携帯電話を差し出す。

「あの、企業の秘書の方だそうです」

「もしもし」

『標的の死亡を確認したわ。よくやったわね』

「私一人の力じゃないさ」

私は、ふつと微笑して通話を切り、携帯を母親に返して、少女の前に屈みこんだ。

「好きに使いな」

広げた小さな手に、私は余ったライフルの弾を手渡した。
「ありがとう」

少女は満面の笑みでそれを受け取った。

変態学園

他教科は人並みだが国語がとにかく不得手だった私は、必死の勉強の甲斐も虚しく、本命の公立高校に不合格。併願し既に受かっていた私立変態学園高校にこの春から通うこととなってしまうのだ。

「うん、いいわね。変学の制服似合ってるわよ!」

「お母さん……。私きつとひどい目に合うよ。入学初日に犯されるよ……」

「知香っ、折角親が大金はたいて私学に行かせてやろうつてのに、なんだいその言い草はっ!」

「もう中卒でいいよぉ」

「中卒の女をどこが雇ってくれるもんですか、このご時世!」

「お兄ちゃんだって中卒……」

私はリビングの共用PCに向かう兄の方を見た。画面の中のアニメ調のキャラクターに微笑みかける兄。

「……やっぱり頑張ってる行ってみる」

「知香はあなっちゃん駄目よ、お願いだからね!」

私立変態学園高校の男女比は9:1。

ここ集会場での入学式に集められた時点で、その異様さは既に明らか。出席番号一番、榎本知香。私の後ろに列ぶ女子は三人しかない。

その一人一人の顔を私は順に見つめていく。この一年時を力を合わせて共に切り抜けるであろう戦友の顔を。

「なに……」

「がんばろっ……。がんばろうねっ……」

小声でエールを送った。

「お前静かにせえ。先生の話が聞こえんやろが」

私はその声にビクついた。関西訛り……。押しの強い関西人……。恐る恐る顔を見上げる。同クラス、男子先頭の男。左胸の名札には『麻原』とある。変態間違いない……。

「式が終わったら私をどうするんですか……」

「はあ？ どうもせんわ」

麻原は浅黒く日焼けした顔を歪めて言った。外見の割にまともな返した。ひよつとしてこの人は変態じゃないのかもしれない。

「なんや、お前大丈夫か。色々……」

私は入学式が終わって教室に移動する際、麻原くんに接触してみることにした。明らかに少数弱者の女子に変態をする目的でなければ、一体何を思っこの高校に入学したのか。それを聞きたかったのだ。

「俺は部活の推薦」

「はあ。エロい部ですか」

「ちゃうわ。水泳やアホ」

水泳と聞いてもまだ私の中のエロい疑いは晴れなかった。

「全裸やないで」

「あつ、そうなんですか。じゃあ健全な方なんですな」

麻原はしょうもないものを見るような視線を私に向ける。

「あんなあ、多分、つか九割方、校名で警戒しとんのやるけど、変態学園って全国的に知られとるし、今時小学生でも反応せえへんで『変学』以外で呼ぶ奴もおらんし」

「そ、そうなんですか」

「なんやお前、テレビとか見らんのかいな」

「お兄ちゃんが、テレビは嘘ばっかだから見るなって」

「アホ。テレビは見いや。嘘ホントは自分で見分けえ」

「そっか……、そうだよな」

確かにそうだよ。この人言ってること正しい。すごい。

「じゃあ麻原くんは変態じゃないんだ」

私はポツリと言った。だが、麻原くんはその言葉に打ち付けられたように急に黙り込んだ。余りの様子に私は慌てる。

「えっ？　じゃ、じゃあ変態なの？」

「……俺は変態やない。正直なだけや。エロいかどうか聞かれたらそりゃエロいわ」

「じゃあっ……、プレイボーイとかブブカとか、家にあるの？」

「まあ……あるわ。つかよう知つとんな」

私は焦り始めた。話しながら歩いていた私たちはクラスの集団にすっかり置いて行かれ、人気のない渡り廊下に二人きりだった。

「みんな、ひよつとしてそうなの……？　男子って……」

「まあそうやな。九割、いや、十割方エロいわな」

私はショックを受けた。

変態は学園のみに留まらず、世界へ。この国は変態国家。まさにこの世は変態ザワールド。

「おい、おい！　しつかりせえ榎本。白目むいとる」

肩口を掴まれ揺すられた私は更に泡を吹いた。

変態学園2

私立変態学園高校、普通科1-1出席番号男子二番、猪俣修介。

私の目の前に座る彼は、眼鏡で細身の秀才タイプ。休み時間は誰とも話さず、大学レベルの勉強に没頭している。

神に性欲を抑制されたような彼であるが……。

「猪俣くん、猪俣くん」

私が背中をつつくと、彼は無言で振り向く。

「次の授業のここんとこ教えて欲しいな」

彼は無言で、私の提示したノートを右回しに自分に向け、サラサラッと答えを記入した。

「ここは代入、そこで因数分解。解が導かれる」

「あそこにダイニユウ、淫数分解」

「阿呆っ……」

私は横から麻原くんに叩かれた。

「クラスーの変態はお前や榎本。なんやその格好」

「体操服だけど」

「無理矢理にエロを導き出そうとすな！ あたっ！？」

私は上手いこと言った彼の足を足払いして転倒させた。即座に椅子を降りて、床の彼に顔を近づける。

「おねがい。猪俣くんに、勉強の息抜きにエッチなことたまにするかどうか聞いて」

「はあ？ なんやそら、要はマスターベーションかい」

私は彼のおでこに頭突きをかました。彼は「あうっ！」と叫んだ。「そういう言い方よして……」

「お前の中のインアウトの基準がわからんわ！」

麻原くんは涙目で私を払いのけて立ち上がる。いつの間にかまた勉強に没頭してる猪俣くんに向けて言う。

「猪俣。この変態女がお前の性事情を知りたいて」

「性事情？ 気持ち悪い奴だな」

「そう言つなや。思春期全開の可愛い奴なんや。答えたつてくれ」
言われて、猪俣くんは既に風評的にボロクソの私を見つめる。

「彼女がいるんだ。あとは察しろ」

遠かった。

「おいー榎本ー？」

授業中、私は彼の背中を見ながら湧き出る妄想を必死に打ち消そうとしたが敵わず、先生に席替えを進言した。

「猪俣くんの彼女との妄想が止まりません」

「阿呆ですか榎本。しかも私は担任じゃありません。座ってなさい」

「無理ですっ……」

「泣かんでもええのに」

高校の頃 11 (前書き)

色々書いて翻弄してしまつてごめんなさい。

高校の頃 11

お、落ち着け。状況を整理しよう。

今俺の目の前では、西校の眼鏡男子とウチの剣道部山田が一本の木刀を仲良く半分こにして打ち合いをしている。

『なあ、どうしてこうなった？』

俺達、ファミレスで突然何をやっているんだ？

「我に返っては駄目です丸山さん！ 貫いて下さい！」

店内ずつと向こうで小宮が叫んだ。

いや、冷静に考えるよ。なに？ マジでこの状況。どういう話にしたかったんだ一体。

俺はそもそも何の義理があつて山田の練習に付き合っていたんだ？ とりあえず、ここを切り抜けることができたなら俺は家に直帰して溜め込んでたゲームやるからな……

「もう絶対、放課後剣道場とか行かねーからな！」

「いいから竹刀渡してよ！ 渡した後は死んだっていいから！」

くそ……。なんでヤリマン押野に全ての汚れ仕事を押し付けなかつたんだ、ついさっきの俺は。

なんで小宮がやると言っていたことをわざわざ引き受けた……。

「ん……？」

そこで俺は気づいた。

「おい小宮、やっぱお前が行けばいいんだよ。竹刀渡すでもなくてお前が横からいつも通り刀を弾けばいいんじゃないん」

竹刀で小宮のいる方を指すようにして言った。

「えっ……えつと……。そっか、確かにそうですね」

「えええ……」

馬鹿、ここに集う。あまりの事態に押野がフラつき倒れかけた。

しかしその時、状況は更に悪化した。一瞬の隙を突かれた山田は、眼鏡の猛連打により押し込まれる。後方にいた小宮と押野の眼前にまで、それは迫った。

「わ……」

「あああつ！」

度々弾かれ暴走した剣の軌跡が、入店ドアのガラスをガスガスと傷つける。

その間だ。山田と入店ドアの間に挟まれて、俺の位置から二人は完全に見えなくなった。

時々悲鳴が聞こえるから生きちゃいるはずだが、声の質からもう色々とし事じゃないのは伺える。

無茶苦茶だ。それらしい突破口も、店唯一の出入り口も塞がれた。

「あ……つて、待てよ」

俺は振り返る。先程から硬直したままの店長らしい人物が目に入る。明らかに役に立たないそれをスルーして俺は、厨房から顔を出し様子を伺う学生バイトのウェートレスに言った。

「ここの店、裏口つてあるでしょ？ 厨房の奥の裏口。メニューの材料とか搬入するつしょ？」

「は、はい」

「逃げる気が……最低だな君は」

嬉々として厨房に駆け寄った俺の背後から、店長がそんな挑発にもならない言葉を浴びせた。華麗にスルーしようと思った俺だが、
「ああ！？ じゃあお前がやってみるっつーの！！ そもそもこの場の責任者だろ！？ ええ！？ そうだろ？ その観点から考えたら今の発言はおかしいだろ！？」

俺は見事に逆ギレしていた。

勢いが功を奏して、店長は「すみません」と謝罪した。

俺も俺で、自らの行った罵倒行為によって疲弊し、その場に膝をつき突っ伏した。

「もうさあ、誰でもいいって。この竹刀、あのクリーチャーみたい

な顔の東校生徒に渡してきてくれよ。ほら、もうあんたでいいよ。渡してきて」

俺は何もかも手放して縋るような目でウェイトレスに言った。

「君、本当に最低だな」

「はあっ！？ 女に頼って何が悪いよ！！ 男と女、色々付いてるか付いてないかの違いだろ！？ そういうさ、女性優位みたいな論調に完璧支配されてんだよこの国は！！」

「なんか知らんが辛いことがあったのか？」

諭すような言葉をかけてきた店長を、俺は掴みかかった手で揺さぶった。とにかく揺さぶった。

そのやりとりの後ろで、俺が地面に置いた竹刀を拾う音がした。

「私、やってみます」

その声に振り返った俺が見たのは、衝撃の光景だった。

ウェイトレスは小走りで入店ドア前の現場に接近。そして一閃。

西校の眼鏡が崩れ落ちた。

「グルルル…… バウバウッ！」

続いて山田と対面した彼女は、一切の間を置かず、咆哮する彼の腹部に向けて、低姿勢からの突き上げを放つ。

ドアガラスが盛大に割れる音がした。しゃがみ込んでいた小宮と押野の頭上を通って、山田は風除室の空間を突っ切り、外扉も突き破って店外に放り出された。

事態は……収束した。

「なんすか、あの子……」

俺は余りの驚きに半笑いで、横に並んだ店長に尋ねる。

「世界は広い。君の価値観で測れないことも決して少なくはない。つまりはそういうことだ」

彼は明らかにそう言いながら失禁していたが、大人の面子というものがあるので流石に俺は黙っていた。

さっき俺は、男女平等の世に不満をぶちまけた。正直、こんな時俺が女ならいいのになんて思った。

だが実際は、男とか女とか関係無しに、この世は実力が物をいう世界だった。

事態は収束した。だが、この物語を収束させる術は恐らく誰も知らない。

THE・殺し屋3

「サトル・カーティスさん。あなた、慢性的な鬱病ですね」

医者 of 言い放ったその一言が私は一瞬理解できなかった。

「先生、私は鼻炎で来院したんですが」

「その鼻炎も鬱からきていますね。あなた、殺し屋って職が性に合っていないでしょう」

「いえ、私は超楽しんでいます」

「心から楽しめている人は自ら楽しんでいるとは絶対に言いません」
私はその医者 of 精神攻撃にちよつと泣きそうになった。

言葉は鋭いナイフだ。私は知らず知らずのうちにそれで他人を傷つけていないかと振り返り、傷ついたことで少しだけ優しくなれた自分に気づいた。

「対処としては、うーん、まっとうな職を探すことですね」

聞いてもないのに対処法を言い出す、推定三十代の医者。

今気づいた。若い。こいつは全て憶測で物を言ってるに違いない。

「チェンジ」

「ここ僕の個人院です」

「というか、耳鼻科の先生が患者 of 精神的な面に踏み込むのがそもそもどうかと」

「僕は人の心と肉体の変調が密接に絡むというのを医者人生の命題としてまして」

「中卒の私でもわかることを真面目に考えておられるんですね」

医者 of 目の下がピクリと動いた。

プロの殺し屋を舐めるな。殺しは実戦と精神戦の総合技術だ。一般人には手を出さない自戒だが、ここまでやられたなら正当防衛が成立する。

「帰らせて頂きます。診察代は払いませんよ」

私は立ち上がった。すると医者も立ち上がった。

「真似しないで下さい」

「真似しないで下さい」

言った瞬間、医者は私の蹴りによって後方に吹き飛んだ。椅子ごと倒れこんで咳込む推定三十代高学歴の男。ざまあない。

しかし私のその慢心は、目の前に飛んだ一本のメスによって切り裂かれた。

「何っ」

危つく脳天に刺さる所だったそれを私は床にぶっ倒れるようにして回避した。

医者はメス数本を指に挟んで立ち上がる。真面目に医療に取り組む者のスタイルではない。

「なるほど。殺し屋キラー」

殺し屋という職業は、しばしば自分自身がターゲットとなる。特に私は我儘な性格のせいで、やり易い特定の企業の依頼を集中して受ける傾向がある。他企業からすれば真っ先に排除したい存在だろう。

「刀っ！」

医者がオリジナルの掛け声で二本目のメスを投げつけるのに合わせ、私は素早く横に飛んだ。そして手荷物カゴの中のさこの紙袋からスナイパーライフルを取り出し、慌てて引き金を引く。

一流は自信がない時でも決して外さない。狭い室内に響く発射音と共に、医者の額に風穴が空いた。

「違う。向かってくる者全てが雑魚というのは、強者の憂鬱に違いない。それでも僕たちたくましく、生きていかなくちゃ」

さあ歌おう。全ての罪が赦されて、歌えばみんな仲良しさ。医者のデスクに置かれたカルテをひっくり返して、裏に私は詩を書こう。患者データ管理用のパソコンでフリーの音声ソフトをダウンロード。即興で作ったラブソングをネットに公開だ。

「せ、先生……！ いやあああ……！」

ナースの悲鳴まで録音されてしまったが、こういう自然なものは

積極的に取り入れた方がいい。あつ、重火器の音が入ればより緊迫感が増すんじゃないかな。そう思った私は、歌いながらスナイパーライフルを全弾撃ち尽くした。

「こ、殺し屋カーティス、ここまで狂っているとはね……」

ナースは白衣から注射器を取り出し、構える。

となると、雰囲気的にこいつも殺し屋キラーということになる。

「なんだこの病院は。医療機関としてこれは大問題だ。即刻、市に苦情を出させてもらう！」

私は怒鳴りつけ、ナースの手にした注射器を奪い取った。

「あつ」

そして影のように彼女の背後へと回り込み、その綺麗な首筋に注射器を突きつける。

あ、あ……と、恐れ途切れるような息遣いが聞こえた。

「よし、そのままゆっくり前進だ。マウスを握れ。録音停止ボタンをクリック」

「は、はい」

私は彼女の力を借りて、歌や悲鳴や銃声や吐息の入った音声ファイルをネット上にアップした。

「忘れ去られていく今日という日を、形にして残すのもいいことさ」
「ひっ……」

注射器を当て、中身を注入する。するとナースは痙攣を起こし、デスクに覆いかぶさるようにして前のめりに倒れた。

空の注射器を放り捨てた私は、歌の続きを口ずさみながら診療室を出て、待合室を通り抜ける。そして病院ドアを開け、平日昼間の強い陽射しの中にまた身を曝すのだった。

ぞ、ころしや4

殺し屋サトルカーティスの自宅のテレビが映らなくなった。

「形あるものいつか壊れゆく運命さだめ」

サトルは前回以来お気に入りのスナイパーライフルをテレビに向け、乱射する。五発程当たるところで煙が上がり、ほんとテレビ台から転げ落ちた。

「暗殺完了」

サトルは次に洗面台に向かった。合わせ鏡が怖い為、三面鏡の二面を取り外した手作り一面鏡だ。女と見紛う程の超絶美形黒髪ロン毛の男が映り込む。

「今日は美容院に行くかな。例の企業から十二時に来いって言われてたけどもう三時だし」

サトルは手ぐしで髪をとかしながら言う。先程起床してから全裸のままだったので、まずはパンツから穿いて、いつもの黒いスーツを着る。（ガンツスーツではない）

「もしもし、カットの予約をしたいのですが」

常時家に置きっ放しの携帯で行きつけの美容院に予約を入れる。電話を終え、携帯をテーブルに置くと、サトルはスナイパーライフルを片手に玄関を出た。

行きつけの美容院の女性店員は、サトルが殺し屋であることをわかってるので、別段驚くこともなく入店した彼からスナイパーライフルを預かった。

「だいぶ伸びましたね」

「うん。今回も長めをお願いします」

サトルは自らに短髪が似合わないことを自覚していた。痩せ型だったし、顔が女性的だからだ。

「君がやつてくれるの？」

「はい。やつとカットを任せてもらえるようになりました」

サトルの前回来店はもう半年前である。当時専門卒業したての彼女に髪を流してもらい、「二十一！？　まさか美容院の店員が年下になる時代がくるとはね！　私も年とったんだなー！」などとわけのわからないことを言ったことを覚えている。その時彼女は、なにこの人……という顔で苦笑していた。

ざくりと、サトルの頭部をすきバサミが挟んだ。

「ご、ごめんなさい。不慣れで……」

「いや、いいんだ」

不慣れとあれば仕方ない。サトルも殺し屋見習いをしていた二十歳の頃は、依頼主を間違つて射殺し怒られることもしばあったのだ。

出血で汚れた顔を丁寧に拭いてもらい、カットが再開される。先程のミスは何だったのかというぐらい、彼女は手練れていた。

アシンメトリーモヒカンにされたが、サトルは怒らなかった。

www.jr.jp www 5 (前書き)

ざwwwころしやwww5

我儘な殺し屋、サトルカーティス。その性格のせいで孤独な学生時代を送った彼にも、友人と呼べる人物が一人いた。

山中という、ミュージシャン志望の男だ。放課後の河川敷で殺人術の練習をするサトル、その横で山中はガシャガシャとギターを弾く。

「荒れているな、山中」

「下手なだけさ」

別に、殺し屋、ミュージシャンというそれぞれの夢を語り合ったりはしなかった。一言二言の会話しか交わさなかった二人だが、同じ場にいることが互い嫌ではなかった。真の友人とは空気のように一緒にいられる者だと、サトルは決して口には出さないがそう感じていた。

ある企業ビルの最上階、会議室にサトルは入室した。殺し屋を雇いライバル企業の邪魔をして利益を上げるセコい企業、という名前でサトルは呼んでいる。

欠伸をかきながらドラドラとやってきたサトルだが、室内の異様な空気に思わず息を呑んだ。

総勢五十名、サトルと同じ殺し屋が室内狭しと集められていたのだ。

サトルはスナイパーライフルを遊びで構えながら進む。ふざけて頭などを狙っても、殺し屋達は動じない。

「ノリの悪い連中だな」

サトルはつまらなそうに吐き捨てた。

当然の如く最前列に着席すると、いつもの企業秘書がやってきた。「今回これだけの殺し屋に集まってもらったのは他でもないわ。“奴”の所在が掴めたのよ」

周囲がざわつく。サトルは元々情報に疎い上テレビも壊してしまったので、奴と言われてもさっぱりわからない。

「カーティス、わからないというか、興味ないという顔をしているわね。山中秀夫と言えればわかるかしら」

何故中学の同級生山中の名が秘書の口から出て、殺し屋達が更にざわつくのかわからなかったが、とりあえず、「山中秀夫なら知っているが」と答える。

「山中を殺すのよ。ここにいる全員で。手段は問わないわ」

昼十二時の街に、五十名の殺し屋が散らばった。チームを組んで行動する者、単独で行く者。サトルは勿論単独行動であったが、サトルが陣取るデパートビル屋上からは他のビルに構える別の殺し屋の姿がいくつも見られた。

「大掛かりにも程がある。一国のトップをやるにもこの人数はない」
肝心な部分が腑に落ちないまま、サトルはスナイパーライフルを構える。繁華街のカラオケ屋から山中秀夫は出てくるという話だ。サトルの位置は最良の狙撃ポイントである。

先程はつい知っていると行ってしまったが、実際のところサトルの知る山中とは同姓同名の別人だろうと思っていた。よくよく考えれば山中も秀夫もありふれている。

しかし、出現予定時刻にカラオケ屋の扉からギターを片手に出てきたのは

「山中——」

彼、いや、“奴”である。

山中秀夫、サトルが十年ぶりに再会した友人は、五十名の殺し屋に狙われる身となっていた。

*

黒のジャケットを着てギターを持った男、山中秀夫。サトルは、

別ビルの狙撃者が狙うよりも早く、彼の周囲至る所に銃弾を撃ち込んだ。

その行動によりカラオケ屋前の空気は一変する。通行人は逃げ惑い、山中は何事かと慌てながら狭い路地に駆け込んだ。

それを確認したサトルは、無言で立ち上がり、スナイパーライフルを片手に屋上を後にした。

山中秀夫は温和な顔つきの男である。無害と言うに相応しい。

その温和な山中は路地裏を抜け、繁華街の人混みの中を必死に汗だくで逃走する。

「なんだよ、なんだよ！」

黒い影が追ってきている。チラチラ後ろに目をやる度に近づいている。接近戦を得意とする殺し屋であった。その後ろを遅れて更に三人四人と別の殺し屋が続く。山中の進行方向からも数人。包囲は完成していた。

武装した七名の男たちがそれとない距離で取り囲むと、周囲の通行人はぎゃあぎゃあ悲鳴を上げて逃げ出し、中心にいた山中は剥き出しとなる。

一人の殺し屋が銃を抜いた、その時、そこに飛び込んだのはサトルカーティスだった。サトルは高速のナイフ捌きで殺し屋達を切り刻み、無力化した。七名の殺し屋が血流を撒き散らして一斉に倒れる。

「同業者のよしみで急所は外しておいた。早く救急車に行くんだな」

ナイフを懷に仕舞うサトルを、後ろからしげしげと覗き込む山中。

「カーティス？」

「久しぶりだな。山中」

山中はまず、サトルの思いきったアシンメトリーモヒカンに目がいった。

「まあ髪型は気にするな。この状況を気にしろ。街ごと約五十人の殺し屋に包囲されているぞ」

サトルがそう言い、こっちだつて来いと逃げ道を誘導しかけた時、秘書の「カーティス！」と呼ぶ声に足を止められ、二人は振り返る。

任務違反を怒られると思いトンズラしかけたサトルだが、秘書の次の言葉がそれを停止させた。

「ナイトメアを知らないの！？ カーティス！ そいつはS級殺し屋キラー、ナイトメア山中よ！」

彼女が言い終わると同時に、一帯をエレクトリックな破壊音声が支配した。アンプ未接続の山中のギターが奏でる原理不明の殺人音楽である。

サトルは咄嗟に耳を塞いだが、頭を鋭く刻みつけるような音は直に入り込んでくる。ギターに掻き消され響かない悲鳴が上がる。

カラオケ屋を始めとする街の電子看板は次々火花を散らして吹き飛び、遠く離れた通行人までもがバタバタと倒れ始める。

音がふと鳴り止んだ時、山中はそこにはいなかった。顔を上げたサトルが見たものは、秘書を後ろからギターによって羽交い締めにする山中の姿であつた。

「カーティス、僕は音楽では成功しなかったよ」

だって音痴だしな、とサトルは思った。

「焦ったよ……。君と同じく中卒だし、これじゃ病気の母と妹の面倒見れないってね」

「カーティス中卒だったの……」

「でもね、あの河原で殺人術の型をやる君が発していた、ある種の狂気。あれがヒントになったんだ」

山中の指が弦にそつと触れる。秘書は目の前のそれを震えながら見つめる。

「ギターってね、その時の感情次第で全く別の音が出るんだよ」

山中が音に乗せた狂気は、一見非武装の殺人兵器だった。そして反殺し屋協会にその腕を買われた彼は、S級と呼ばれる超危険レベルの殺し屋キラーとなつたのだ。

サトルは、失神したかと思ふ程に目を細めて山中を見る。

「下手くそなラブソングを弾いていた頃のお前は」

「死んださ」

言うと同時に山中が指に力を込め、秘書が目を瞑って歯を食いしばったその時、サトルはその場を舞うように旋回し、背中から抜き出したスナイパーライフルを発射した。従来の弾速に加え遠心力が加わった銃弾は、山中が弦を弾くより一瞬早く彼の額を貫いた。

「爆球連発スーパードマン」という漫画を知っているか。そのガンマという登場人物が編み出した、腕振り遠心力を用いた特殊発射法だ。お前が私からヒントを得たのと同じように、私は漫画を見て殺人術を磨いた」

そんな必殺技のルーツをサトルは恥ずかしげもなく語った。

誤魔化しであった。友人を殺らねばならなかった彼の頬にはそれでも、一筋の涙が伝った。

サトルは倒れた彼に近づく。へたり込んだ秘書の前を横切って、彼のギターを拾い上げた。

「君だけで良かったのさ、あとはみんな死ねばいい」

友へ、と名付けられた即興の曲。ポロロンとギターを鳴らしたと同時にサトルは失神した。

ああああああ――！！！！！！

うるさいんだよ。

うるさい。うるさい。うるさい。俺の前から消えろ。

誰も俺に構うなよ。鬱陶しいんだよ。

消えろよ。消えろ。

一人になりたいんだよ。お前らと一緒にいると、俺がどんどん虚弱になってくんだよ。寄ってくんない馬鹿。

俺はそう携帯に書き殴った。携帯のメモ機能に書き殴った。そして、ベッドの上でとぐろを巻いている布団を蹴飛ばし、そこに頭を打ち付けた。

俺が正常でいらなくなるだろ。お前らの声を聞くと。

凄く厄介だよ、お前ら他人が……。

徐々に落ち着いてきた俺の頭に、さっきあいつに言われた『あの言葉』が、わつと蘇った。

『ああああああ――！！！！！！』

俺は雄叫び上げて、力任せにベッドを持ち上げ、窓の方にぶん投げた。窓は一部割れたが、フレームが邪魔をして、ベッドは部屋内から出ることはなかった。

俺はそれが無性に許せなかった。怒りのまま、曲がった窓フレームに蹴りを入れると、呆気なくそれは外れ、二階にある俺の部屋から落下した。ガシャンと音がした。

俺はすかさず、床に転がったとぐろ巻きの布団を窓から放る。同じく枕も拾ってぶん投げ、最後にベッドを持ち上げ、思いつきり投棄した。

続いて俺自身も窓から飛んだ。一カ月ぶりに外に出た。凄く、世界の広さと、二階の高さを感じた。

俺は、真ん中から折れて壊れたベッドの上に足から突っ込んだ。膝と肘を少し痛めた気がしたが、全然、余裕で立ち上がり、動くこ

とができた。

俺は、隣の家の娘が庭先から俺を見ていることに気づいた。中学生の娘だ。俺がベッドの残骸を持ち上げ、振り回して、地面に打ち付け、割れ目から二つに折ると、その娘はそそくさと家に入った。

俺はそれを見送ると、その後も、ベッドを更に破壊し続けた。一つ、残骸を折ったり、叩き付ける度に、

「働け」

「病院行け」

その二つを交互に繰り返しながら、俺は、特に「病院行け」の方を念入りに殺した。

ふと隣の家を見ると、中学生の娘がドアの隙間から俺を見ていたので、俺は「死ね！ 死ね！ 誰もお前に欲情するかよ！」と暴言を吐いて、枕と布団を投げつけた。そして、門前まで行って、インターホンを全力で連打した。

「警察呼びました！」と娘がまた顔を出して言ったので、俺はインターホンを指でむしり取って破壊して、その場から走り出した。

俺は、すぐ近くを流れる川沿いまで走って、そのままの勢いで、インターホンをぶん投げ、投棄した。

「あああああー！！！！ 馬鹿、馬鹿、馬鹿！ 死ね死ね死ね死ね！ うあああああー！！！！！！！！」

俺は、その後警察に捕まるまで、ずっと、川沿いの土手の土を裸足でとにかく蹴散らしていた。

あああああ――――！！！！（後書き）

以前の作品です

THE・殺し屋 6

ある日、殺し屋サトルの自宅に一通の手紙が届いた。差出人の名は、『殺し屋モニカ（六歳）』とある。

サトルはモーニングコーヒー片手にそれを開け、中のくま柄便箋を面倒臭そうに読み始めた。

「体裁や羞恥を捨て一生懸命に物事に尽力しなければ自己の発展はない。殺し屋サトル、よってお前はカスだ」

何じゃこの手紙は、と思いつつ、馬鹿な、私は日々を精一杯に生きている、とサトルは慌てる。慌てるのはどこか凶星であるからだ。非情な殺しの任務の場であつてもついふざけてしまうこと、誰にも何も言われたことはないが、実は冷めた目で見られてるんじゃないかとずっと不安だつたのだ。

殺し屋モニカからの手紙はその文面のみで終わっていた。サトルは手紙をテーブルに置くと、すぐに携帯で殺し屋協会管理組合に問い合わせた。

「モニカという殺し屋への苦情をいいか」

『そういつた受付はしておりません』

若い女性のオペレーターは言った。

サトルは「なら会わせろ。六歳女兒に色々して、この小説を児童ポルノに抵触させてやる」とまたメタ的なことを言つてカスつぷりに拍車をかける。

「というかあんたでいい。私と会つてくれ」

女に飢えていたサトルはもう誰でもよかった。

『モニカ司馬咲さんにお繋ぎします。少々お待ちください』

「いや！ あんたが いいんだ！ 頼む、代わらないでくれ！」

言い切る前に保留音の第九が鳴った。

サトルは床一点を見つめながら、しばらくして、「少し熱くなつてしまったな」と荒いだ息を整えた。

『お前がサトルカーティスか？ ナイトメア討伐の際の話は聞いている。色々やらかしたそうだな』

電話口から聞こえてきたのは、異様にしつかりした口調だが紛れもない子供の声だった。そうとわかるやいなや、サトルは女性器の名称を大声で連呼する。

彼女、モニカ司馬咲はしばらく黙っていたが、ふいに

『なあ、情けなくないか？』

と、憐れむような声で言った。

「……」

『あんた、二十五だろう。いつまでそんなことをやっているつもりだ』

「モニカちゃんが十八十九になるぐらいまでかな」

小さい女の子と話すのが久々なサトルは舞い上がっていた。続けてどうぶつの話や女兒アニメの話を振ったが、全てスルーされた。

『ここまでカスとはな。何故お前のような奴が崇高な殺し屋の道を選ぶに至ったのか私は理解できない』

「“崇高な”？」

今まで締まった表情ながらもデレ声で対応していたサトルは、堅い口調で返す。仕事へのモチベーションが低い彼にとって、それはあまりに違和感のある言葉だった。

「何を言っている。殺し屋は中卒でもできる底辺の仕事だぞ」

『何だと』

今度はモニカが反論した。

『殺し屋による殺人業務は、知恵と力ある者だけに許された、世界の浄化循環行為だ。お前は何も考えずにどこかの企業の敵を潰しているんだろうが、殺し屋の存在意義はそんな端の仕事にはない。今回のナイトメアのような、世界的危険因子の排除こそが……』

「ところでモニカ司馬咲さん、反殺し屋協会が掲げている思想をご存知かな？ 不思議なことにそれは、今貴女が言った崇高な内容と

ほぼ一致する」

構わず続けようとしたモニカの声が一瞬止まった。

『……ほう、何故、敵対する反殺し屋協会の思想を知っているんだ？』

「ホームページに書いてあった」

電話口から、子供なりの小さな体が転倒する音が聞こえた。サトルは、かわいいなあと微笑む。

「私が言いたいのはな、モニカさん、誰もが自らの正義を信じて生きているということだ。相手と真逆の視点を持てば敵になるというだけ。だとすれば、広義的な間違いなどこの世に存在しない。二トであれ、戦争屋であれ、私たちのように直に手を汚す者であれ、当人にとってはそれが聖職となる」

『そうか。神の視点だな、一介の人間が』

「逆だな。上から見下ろした者が神なのさ」

『じゃあ私は？』

「蟻だ」

サトルの言葉を最後に、数秒の無音が続いた。

やがて、か細い声で『勝負しろ……』と聞こえた。

『信じるものも無しに強くなになれるはずがない。カーティス、お前のこれまでの功績を、勝負に勝つことで全否定してやる』

「功績？ そんなのあったかな。いちいち憶えてないな」。殺し屋はただの食い扶持だから」

『貴様……』

モニカの噛み殺したような声が聞こえた。

サトルは、やはりなと笑みを浮かべる。司馬咲の姓は思った通りのそれだった。殺し屋協会創設者であり現名誉会長の司馬咲源蔵、その孫娘が最年少で殺し屋ライセンスを取得したとの噂は、流石の情弱サトルの耳にも入っていたのである。

一昨年、やる気がピークだった頃に、サトルは反殺し屋協会の役員を軒並み惨殺したことがあった。その時、司馬咲会長直々に手渡

された表彰トロフィーは、当時散々自慢して回った拳句に例の企業の秘書室に置いたままという粗末な扱いぶりだ。

電話先のモニカがそのことを知るはずはないが、サトルの言動から、祖父や協会を軽んじていることは十二分に伝わったらしい。重度の祖父つ子と評判の彼女は、震えがかった声で言う。

『殺し屋流儀に則った勝負を行う。日時は追って指定しよう。逃げるなよ、カーティス』

「臨むところだ」

サトルはフツと笑って電話を切った。

携帯の画面を見て、三十分近い通話時間に満足げな顔を見ると、すうと息を吸って、

「やったああ！ 小さい女の子と遊べるぞっ！ ヒャッホーウー！」
と、思い切り腕を天に突き上げ、その場で大ジャンプをした。

THE・殺し屋 7

追つての連絡の通りに、サトルは司馬咲家の大屋敷にやって来た。時刻は十八時。初夏の今日、まだ周囲は明るい。

山を丸一つ土地にした豪邸が目の前に広がっていた。協会のパーティーで何度か訪れたことがあった為、その桁超えの豪華さにも別段驚くことはない。

インターホンを押すと、使用人らしき女性の応答の後、大きな門が横に開いた。実弾の入ったスナイパーライフルで窓などを狙いながらサトルは進む。

反応はない。会長の自宅でこれをやれば大事と思つての行動だったが、怒られたり撃ち返されたりなど、ごく普通のレスポンスすら見られなかった。

「身内として見られているということか」

サトルは上の人間に可愛がられる性質を自覚していた。何せ可愛いからだ。

文句を言いつつも仕事に従順な為、なんだかんだで企業秘書からは氣に入られている。時々子供のようにふざける癖もあるが、年配の会長からすればそれもやはり可愛い。

サトルは総合的に可愛い。それを逆手に取つての好き勝手である。

屋敷内から迎えに現れた使用人に案内され、サトルは西洋風の客間へと通された。広い室内を占有する長テーブルには豪華な食事がこれまた隙間なく置かれており、奥の席には司馬咲会長、その向かつて左側にはお人形のようなブロンドの巻き髪にドレスの少女が既に着席していた。

「よく来たね。座りなさい、サトル君」

会長はサトルに満面の笑みを向け言った。

「お久しぶりです会長。そして、モニカさんかな。はじめまして」

着用していたサングラスを外し、サトルは礼儀正しく挨拶をする。モニカ、とされた少女は、その様子を静かに睨んだ。サトルはにつきりと返す。

「モニカ司馬咲です」

モニカは立ち上がり、両手を前で重ねて上品に頭を下げた。

「先日の任務でのカーティス様のご活躍は耳にしました。殺し屋としても人としてもまだ若輩の私ですが、貴方のような先輩に倣って精進していきたい気持ちです」

「いえ、先日のことは大失態ですよ。ナイトメアを倒す為に味方を数人巻き込んでしまうなんて。貴女のような将来有望な方が私などを倣うべきではありません」

サトルがナイトメア戦で味方の殺し屋を切り刻んだ件は、報告書上はそういうことになっていた。しかし実情を知る者には、任務中の暴走行為として記憶されている。企業秘書、又は被害を受けた数人の殺し屋の誰か。そのいずれかの筋から真実を聞き出したのだらうと、不敵な視線をぶつけるモニカを見てサトルは思った。

「ナイトメア、山中秀夫は私の親友だったんです」

会長が見ている。この話を切り出すには頃合いであった。

「サトル君、それは初耳だ」

思った通りに会長は目を見開いて食いついた。モニカは咄嗟のことに意外な顔をしながらも懐疑の目を向けた。

「山中は貧しい生活の為に殺し屋キラーとなった哀しい男でした。しかし、私は殺し屋として彼を殺らなければならなかった。心の中に矛盾を抱えながらも……」

ぎゅっと胸を握り締め語るサトルに、会長は「うん、うん」と共感する。二人を交互に見比べ、モニカは啞然とした。

「そうなのだよサトル君。我々は殺し屋である以上、その矛盾と戦いながら生きていくしかないのだ。愛する者を撃たねばならない時もある。辛かったね……」

「いえ、職務ですから。これを放棄しては、私は本当に何の為に戦

うのかを見失ってしまいます。ただ、会長……遺された彼の母親と妹が、私は唯一気がかりなのです」

言った瞬間、ガタンと会長は立ち上がった。

「君は見上げた若者だ！　すぐに手配しよう。ナイトメア山中の家族の生活は殺し屋協会で保障しよう！」

「……ありがとうございます」

サトルはうつと涙ぐんだ。

間違いなくこれは好感だった。深く追及を受ければ言い訳がきかないと思われた暴走行為も、会長の中でうやむやになることが予想された。

全員が席から立ち上がり、サトルの鼻をすする音が妙に響く部屋内で、会長が口を開いた。

「モニカよ。お前も彼のように、殺し屋の職務の為に愛する者の命を奪うことができるか」

モニカは顔を引き締め、

「できます」 淀みなく言う。「敵前で銃口が迷うようでは、協会や世界の発展を推し進めることはできません。例えそれが友人、恋人であつても」

「儂が相手であつてもか」

モニカはその言葉に息すらも止めた。

「そ、それは」

モニカの狼狽に、会長は顔を顰める。

「誰か個人への肩入れは、職務に支障をきたす。最悪で、目的を共にする仲間すらも裏切りかねん」

くっ、とモニカはサトルを睨んだ。ナイトメア戦でのサトルがまさにそれだ。しかし今の彼は未だ俯き、スーツの袖で大袈裟に涙を拭っている。

「モニカ、お前は何の為に戦うのだ？　儂のことを想うのなら、儂という人間はいつでも殺せる覚悟をしておけ。人は肉体ではない、意思こそがその本質だ。この司馬咲源蔵の意思を、その宿った協

会の目的を何より優先させる」

「はい……」

会長は険しい顔で言った。物心つく前に両親を任務で亡くしたモニカにとって、祖父である会長は親代わりである。会長は孫への優しい眼差しと同時に、親としての厳しさもモニカに向けていた。

袖の間から薄目を開けるサトルには、それが体のいい洗脳に見えた。

「失礼、サトル君。折角来てもらって立たせっぱなしだったね。今日はモニカの遊びの相手をしてくれるようで、僕は嬉しいよ。殺し屋勝負の舞台は既に用意してあるが……まずは食事しようじゃないか」

「はい。お邪魔させて頂いて、その上こんな豪華なお料理まで……。ご厚意が染み入ります。モニカちゃん、食べ終わったらお兄さんといっぱい遊ぼうね」

サトルはウインクを飛ばしたが、モニカは床一点を見つめたまま微動だにしない。祖父から受けた言葉が相当に応えたように見えた。サトルはそれを冷笑し、席についた。

*

会食の後で一同は、司馬咲邸敷地内の外れにある巨大演習施設へと車で移動した。

ドーム型の施設内に入場し、使用人によってサトルは更衣室へと案内される。モニカも同様に女子用の更衣室へ。会長は護衛の使用人を引き連れて、エレベーターで二階の観覧席へと上って行った。

「殺し屋勝負——殺し屋に模擬戦をさせるなんて、それ自体が矛盾していると思わないか。お姉さん」

ホテルのスイート程の広さの一人用更衣室兼、戦闘準備室。入口の前に立つ使用人の女に向かいサトルは言った。「プロテクターの

装着手順は知っている」と、丁寧にレクチャーをしようとする使用人をそこで制したのだ。

「殺人というのは端っからタブーを侵す行為だ。それがルールに則って技術を競うなんて……まあ君に言ってもわからないかな」

「……」

会長の目を離れた途端に爆発的に肥大したサトルの殺気に、使用人は凍りついていた。

不必要に全裸になったサトルの尻から、目を逸らしたくてもできない状況となっていた。

「そう見られると恥ずかしいな。会長も君みたいな美人をわざわざ付けてくれなくても良いのに」

「……演習で実弾を使用させない為です。入場時にお預かりしていたスナイパーライフルは既に全弾麻酔弾に換装され、演習場内は火薬検知センサーも設置されていますが、私は客人である貴方を監視する為に遣わされました」

使用人は驚くべきことに目的の全てを吐いた。本性を表したサトルに、隠すことの一切の無駄を悟ったのだ。

「ああ見えて私を警戒していたか。会長もやはり孫が可愛かったんだな」

サトルは不要と止められた金的プロテクターまでしっかりと装着し、また元のスーツを着る。綺麗な尻と同時に、その抜かりのなさを使用人に見せつけていた。

続いて武器整備台の前に立ち、置かれていたスナイパーライフルを持って眺める。言われた通り、弾倉には緑色の上質麻酔弾が込められていた。予備弾が入った小さなポシェットも傍にあった。

その様子を張り詰めた面持ちでただ見つめていた使用人は、ハッと我に返った。慌てて口を開く。

「カーティス様、上着の着用は認められていません。身体ラインを浮かせる為に指定のボディスーツを」

「ところで君、私は麻酔弾というものを使ったことがないんだが、

これは頭部に当てても大丈夫なのか？」

言うと同時に腕を伸ばす。銃口は使用人の額に向けられていた。

「あ……」

更衣室入口のドアが僅かに揺れた。室外からそれに気づく者は誰もいなかった。

施設内に五つある演習場のうち、最も設備レベルの高い、ここ第一演習場。ホログラムターゲット、実体ターゲットによる仮想敵シミュレーションシステムの搭載に加え、用途に合わせた電子壁によるエリア面積の変更が可能である。

今回の殺し屋勝負に際し、演習場内は約三千平方メートル——一般の学校施設の体育館と同等の面積が設定されていた。

更衣室より直通の防弾自動ドアが開き、赤色マーキングの場内南側からモニカ司馬咲が入場した。小児用ボディスーツを着用し、右手にはサブマシンガンを所持している。

場内は小規模のジャングルの様相を呈していた。葉の垂れ下がった熱帯樹。天井にはホログラムの日光と澄んだ青空。会長がいる観覧席は、こちらからは確認できない。

モニカは数歩歩いて、足元に設置された彼女の体半分程の岩を乱暴に蹴り飛ばした。岩は一部粉碎され、一メートル先に重たく落下した。ホログラムではない。実物だった。

スーツ内の全身に身につけたプロテクターによつて、モニカは半自傷的に暴れまわっても怪我をすることはない。だが、実物の岩を破壊した蹴りは彼女本来の、日々修練された筋力によるものだ。

モニカの表情は平静であつたが、その衝動的行為には明らかかな苛立ちがあつた。

対面する青色マーキングの北側入場口が開き、サトルカーティスはいつものフォーマルスーツ姿で現れた。大仰な金的プロテクターにより股間が異様に膨らんでいたが、モニカは眉一つ動かさなかった。

「狭いな」

サトルがまず口を開く。フロアの狭隘さに加え、木々などの遮蔽物。モニカの所持するサブマシンガンに有利なステージと言えた。

「お祖父様から愛されているじゃないか。モニカ司馬咲嬢」

サトルは優しく微笑んで言うが、対するモニカは表情を変えない。「私はあの方の思いに応えようと努めている」

「つまり、不真面目なのに会長に評価される私が気に食わないと」

サトルはスナイパーライフルをブラブラと振り回しながら、蔑んだ笑みを浮かべた。

「君は気張りすぎじゃないのか。だが――」

途端におたふくのような満開の顔になって

「それがモニカちゃんの、い・い・と・こ・ろ」

指を小刻みに動かして言うその仕草に、モニカの苛立ちはピークに達した。戦闘開始の合図はまだされていないが、構わずサブマシンガンを目の前の不細工面に向けようとした、

次の瞬間、サトルの振り回していたスナイパーライフルの角が、思いがけず彼の脚の脛に激突した。

「いっ……てええーっ！」

悲鳴を上げ、サトルはお気に入りだったスナイパーライフルを八つ当たりの的に遠くに放り投げてしまった。

「うーっ、うーっ……!!」

モニカは啞然とした。二十五の成人男性が、女々しい声を出しながら痛みに飛び跳ねている。今のこの状況でなくとも場違いな光景だ。

「ああ……飛んでいつちゃった、私のスナイパーライフル……」

強打した脛をさすりながら、サトルは悲しい顔をした。

見兼ねたモニカが、「仕方ないな」と、彼に武器を拾いに行くことを許可しようとした、その時だった。

「もう、これで戦うしかないよ……」

サトルは懷から三十センチ片刃のファイティングナイフを取り出

した。

同時に、場内に戦闘開始のブザーが鳴り響く。

「な……」

吃驚するモニカは、一瞬出遅れた。

慌てて、再度鋭い眼光で見据え、構える。その手に不釣り合いのサブマシンガンが火を吹いた。

銃の仕様に合わせた九ミリの特注麻醉弾。一発のみでも超高額のそれが惜しげもなく連射され、床に敷き詰められた軟砂を激しく吹き飛ばす。

しかし、発射の瞬間には捉えていたはずのサトルの姿は、既にな
い。

モニカの顔が焦燥に歪む中、唸るような風の音が頭上で鳴った。
猫のそれに似た着地音が背後で囁く。気づいた時には、首筋に冷
たい刃の感触があつた。

「ばかな……」

モニカの手からサブマシンガンがごとんと抜け落ちた。

ホログラムで遮蔽された観覧席で、司馬咲源蔵はその大身を乗り
出していた。下方のモニターガラスにパタパタと大粒の汗が落ちる。
大きく開口しながらも、言葉はない。

殺し屋サトルカーティスはまさに影だった。その細い体躯で敵の
死角に入り込み、存在を悟られることなく急所を一突きする。今で
こそふざけて大型のスナイパーライフルを振り回しているが、本来
はこのような接近暗殺こそが彼の十八番である。

ナイフを当てたまま、「楽しかったね。また遊んでくれるかな……」

…今度は実戦で」

サトルの囁きにモニカは答えない。首筋のじわじわという発汗だ
けが、彼女の追い込まれた心情を表していた。

サトルがナイフを懐に仕舞い、その殺気が完全に消えたことで、
モニカはやっと声を出すことができた。

「その強さはなんだ。何故お前のようなふざけた奴がそんな……」

しかし振り向くことは敵わない。プライドの為、恐怖の為。そのいずれもであった。サトルはゆつくりと口を開く。

「強くなりたければ本を読むといい。それも活字本ではなく、漫画だ。アニメもいいかもな」

「絶対嫌だ」

モニカは即答した。そしてぎこちなくサトルに振り向く。引けがちな姿勢からは、距離を取りたくても取れない心情が伺えた。

「私は認めない」睨みつける眼には、痛々しいほどに必死の虚勢。

「いいだろう、サトルカーティス。実戦でリベンジを……」

震えがちな声で言いかけたその時、ドアスライドのエア音が鳴った。フロア東側の空間が開き、そこから会長が雄叫びを上げながら飛び出した。

「おおおおお！ モニカよおおお！」

咄嗟のことに身を固めるモニカを、会長の巨体は奪うように救い上げ、ぎゅうと抱きしめる。窒息しかかる孫娘を胸に、会長は涙していた。

「すまなかった、モニカ。僕は間違っていた。お前の殺し屋業への熱意に見合うよう、今まで厳しい教育をしてきたが……僕は、僕は、それでお前にもしものがあつたら、天国の息子夫婦に顔向けができない……」

「そんな、か、会長」

モニカは困惑した。すんすん鼻を鳴らし、ただ祖父は泣きじゃくる。世界中の殺し屋を束ねる巨大組織のトップの姿はそこにはない。そもそも祖父の言うモニカの熱意は、会長である彼の為のもの。ただ一人の肉親である彼の役に立とうとすることは、誰に言われずとも当然のことだった。しかし同時に、それが年相応の甘えの許されない道であることがモニカを少なからず苦しめていた。

殺し屋の責務を抜きにした目一杯の愛情を、彼女は無自覚に欲していたのだ。

「おじいちゃん……」言い直したその顔もまた、六歳の少女のもの

だった。祖父の心が近づいた。背伸びすることのない、素直な喜びの涙があった。

少し離れた茂みからスナイパーライフルを拾い上げたサトルは優しく微笑み、二人を見つめていた。

シャドウ猫（２）

少しだけ、今まで歩いてきた道を振り返ってみよう。

君は何度も右へ左へ道を逸れた。立ち止まって足踏みしたこともきつとあった。

楽しいことはあったはず。

その中に、正しいことはあっただろうか。

正しいことが一つでも。

「間違つてると信じて行動する生き物はいないよね」

鴉のような漆黒の毛色の猫、シャドウ猫は、電柱の上の直径三十センチにも満たない面に四本脚を収めて立つ。それこそ遠目に鴉のように。

彼女の目下十メートルには、言い争う若い男女の姿。シャドウ猫は「んー？」と首を伸ばしてそれを見下ろす。

「馬鹿じゃないの、転職なんて！」

「俺は馬鹿じゃねえ」

場所を気にせず声を荒らげる女の人の顔を、男は静かにじつと見て言った。

「今の日本の情勢見て物を言つてよ……。それと、自分の状況も。あんたが好き勝手やって、私はどうなるのよ……」

「お前も幸せにする」

「幸せじゃないって、もう！」

激昂が飛んだその瞬間、女の人の頭の上に何かが降り立った。

二人がそろそろと同時に見上げたそれは、シャドウ猫。

「確信犯って言葉があるね。頭のいい兄ちゃん、ちよつと意味を言つてみてよ」

「なんで猫が喋つてんの……」

軽くパニックになる女の人を置いて、男は今度はシャドウ猫をじ

つと見つめた。

「“わざと”……っていうのは誤用で、本来は、“正しいと信じて犯罪を犯す人”のこと……」

「正解」。では、間違いを犯すことは正しいことでしょうか？？」

「なに言ってるの、この猫……」

「そ、そうやって人は学んでいくんだ。間違いを犯さなければ間違いには気づけない」

猫の口がちゃんと母音の形に動くという光景を見ながらも、男は平静を心がけて言った。それは彼が本で学んだことであり、実体験から導き出した答えでもある。

シャドウ猫はプツと軽く吹き出した。そして肩を震わせてどうにか笑いを堪える。女の人の頭はそれに合わせて上下した。

「あんたは本物の確信犯だね。自分の選択が間違ってる可能性も含めて、全部正しいと信じて行動してる。うんうん、いいよそういうの」

男を褒める素振りを見せたシャドウ猫。

「でも……」と男の目を悪戯に笑うと、途端に態度を裏返した。

「それって彼女の優しさに甘えてるだけなんだよねえ。反論しながらも好きにさせてくれる彼女の好意の中で遊んでるだけ！上手くいくわけない、別れる別れるー！」

女の人がむっすり無言で頭上を両手叩きすると、もうシャドウ猫はいない。代わりにどこからかケタケタと笑い声が聞こえる。

頭上の陽が作り出した、二人の影の中だ。女の人のスカートの下方で、鋭い赤眼が二つ開く。

きやあと悲鳴を上げて女の人を踏み潰そうとするのを、「やめろ」と言い、男が肩を掴んで止めた。

シャドウ猫の赤眼は、パタパタと二、三度瞬きをした後、ふっと影に飲まれるようにして消失。そこには人間の二人だけが残された。しばらく言葉の出なかった男が、口を開いた。

「別れるだってよ。……俺は嫌だ」

「私もいや」

女の人は間髪入れずに声を張り上げる。妙に強張ったそれに、男は目を丸くした。

「ゆっくり話し合おう……」

彼女は少し顔を赤くして言った。

「別れた方が幸せなカップルを、またくつつけてしまったね。あたしは」

先程とは少し離れた路地を歩く。シャドウ猫は、自分が掻き回した後の二人の成り行きを想像して独り言を言った。喧嘩の反動である後はホテルだ、きつと。

「超いかがわしい。不潔」

綺麗な声でけらけら笑った。

今のような状況。あの小太り童貞猫なら、本人達の意味に任せるのだろう。それって自分が存在してる意味ある？ シャドウ猫は思う。

ただ面倒くさいだけ。面倒を受け止める気力が湧かないだけ。本人は格好いいと思ってるらしいけど、そんな生き様、死んでいるのと何も変わらない。

シャドウ猫は、隣にずっと続く民家のブロック塀に飛び上がる。

猫だから当然、その上を器用に歩く。

いいことの反面、悪いことがある。あのカップルは、シャドウ猫の言ったとおり数年後に破局を迎える。

ただ、女の人の体には新しい命が宿る。

——いいことはどれ？ 悪いことは？

わからないのだから、強く信じた道を行くのがシャドウ猫。弱いあまり、信念を失ったのがはっぴい猫。

はっぴい猫は人気者で、シャドウ猫は少し近寄りがたい。

それは当然だ。はっぴい猫は自分を大事にしている、対するシャドウ猫は嫌われ者の道突き進む強い猫なのだから。

塀の上のスズメが二羽、シャドウ猫が近寄ったことで慌てて飛び立った。シャドウ猫はむっすりむくれて他所を見遣る。

一軒家の民家の縁側には、向かい合って座って夏休みの宿題をする姉弟の姿。白のワンピースを着た姉の方に、シャドウ猫にはどこかで見覚えがある。

「にゃーお（ばーか）」

シャドウ猫は歌うように暴言を吐いた。

「あつ、シャドウ猫」

姉の方が顔を上げ、サンダルを履いて駆け寄った。

「なんか元氣してるみたいで腹立つなあ」

塀の上のシャドウ猫を撫でようと手を伸ばすのはゆうちゃん。あとちよつとのところで先生への思いを遂げられなかったゆうちゃんだ。

「この間は服ありがとう。洗って返します」

「あたしが出した服だけど、別にあたしの物じゃないし。返さなくていいよ。つーか着れないし」

“この間”——先生に置き去りにされ、公園で全裸で泣いていたゆうちゃんに、はっぴい猫は運命として全てを受け入れさせる姿勢をとった。それに見兼ねてゆうちゃんの前に現れ、少女趣味の服を出してあげたのがシャドウ猫だったのだ。

「言つとくけど、あんたの邪魔したのもあたしなんだよ。恨まれはしても、感謝される言われは」

「うつん、よかったんです。あの時止めてもらえてなかったら……色々変なことになってた」

ゆうちゃんは恥ずかしそうに俯いて言った。

「姉ちゃん、猫と話してる……」

ゆうちゃんの後ろで、ゆうちゃんの弟が青ざめた顔をしていた。ちらっと目をやって、シャドウ猫はまたゆうちゃんの方を見る。ゆうちゃんの肯定的な態度に安堵なんてしなかった。逆に今度は不安

が過ぎった。

「あいつはさ、よくわからなくなってるんだよ。考えすぎで、単純な善悪の区別がね……」

シャドウ猫ははっぴい猫のことを言っていた。「許してやって」なんて言葉が口をつきかけた。しかし思いとどまる。あいつのフォローしてどうするんだ。

ゆうちゃんは「ううん」と首を振った。

「はっぴい猫は私の好きにさせてくれた。先生に告白して、一緒にドライブして、あの時は確かに私、一番幸せだったんです」

「姉ちゃんそれ淫行じゃん……」弟が口を挟んだ。

「私の人生、何があっても私の責任ですからね。はっぴい猫のシャドウ猫も親切で……先生だってそう。誰かを恨んだりとかは、やっぱりできません」

きっぱり言うゆうちゃん。シャドウ猫は見透かすような顔をした。「なんかはっぴい猫と似てるね。あいつみたたく何もできない不能にならないようにね」

「不能……そんなことないですよ……」

一瞬当感したような顔を振り払って言ったゆうちゃん。

シャドウ猫はぷいと顔を逸らして、そこで会話を終えた。ゆうちゃんに向けたおしりの、尻尾でもって「じゃあね」と挨拶をして、ブロック塀の上を歩いて去っていく。

ゆうちゃんの『ゆう』は優柔不断の優だな、とシャドウ猫は思った。誰かを激しく憎むほどの強い感情は、人を活動的にさせる。一般に優しさと呼ばれる概念は、物事を自ら推し進める者からすればただの散漫なのだ。

外国を飛び回り、色々な人を見て、人の仕組みが粗方わかった時点で、シャドウ猫は人への興味をなくした。ただ、目の前でくだらないことが起きようとしているなら邪魔をする。それだけだ。

はっぴい猫と自分の違いを、シャドウ猫ははつきりと自覚している。それは、自らの過ちや無意味さに目をつぶるか否かだ。

周囲が見えすぎると何もできなくなる。シャドウ猫は強い。だから、前以外を見ない。

——— 少しでも、今まで歩いてきた道を振り返ってみよう。
シャドウ猫は振り返らない。
立ち止まることもない。

今までに正しいことがいくつあっても、シャドウ猫にはそれが見えない。

「正しさなんてくだらない。楽しい方がずっといいよ」
差し掛かった民家の影に、シャドウ猫はするりと消えた。

シャドウ猫(2) (後書き)

お気に入りにしてくれてる人、
なんだかんだで継続して見てく
れる人、ありがとう！

或る指摘（終）

「これはたぶん、？殺し屋さん？かなあ」

（うつ——）

僕はぎくりとする。編集の彼の目は冷ややかだ。編集の彼、というのも、事実としては何ら間違っていないのだが、しかしこの言い方では少し誤解を招く。そうと知りつつ使ってしまうのがまさに僕なのだが。

三つ上の従兄弟に、僕が無残な素人小説を書いていることをばらしてしまったのは、昨年末の帰省のとき。なんだって、学生時代はイギリスだどこかに留学しており、今は東京の方で仕事をしているため、いつもは顔を合わせない彼と実に十数年ぶりに会いお酒を一緒にしたこと、加えて、彼が文芸雑誌の編集をしているとその時はじめて知ったことが僕を狂わせた。

僕はこれまで忍者のように隠れて小説を書いてきたし、それは僕が素人でありバカでありその作品が他人に堂々と見せられる次元のものではないからというよりは、単なる恥ずかしさのためであったし、だから極力、他人に悟られないように小説を書いていた、そんな僕だから、久しぶりに再会した従兄弟が文芸編集なる仕事をしていようと、いや、それならばなおさら、僕がこども文芸をしていることは隠しておかなければならない筈だった。

しかしそのころの僕は不幸なことに、ピーク的に自信がなかった。創作初期衝動の麻酔が切れて、当たり前なのだが、才能がないのではないかと疑いはじめていた。そこで、暴走をした。忍者であった自分へのアンチ的行動をとるようになっていた。もっと大っぴらに動かなくては、小説の上達のための情報は入ってこないぞ！自分には才能があるんだと勿体ぶって、ただ待っているだけではだめだ！そう、世界を開かなくては！

僕は、それまで何があっても頑なに閉ざしていた自己のとびらを、

小説への欲によって、いとも簡単に開けた。会話には積極となった。上司のくだらない話でもよく聞いた。当然、こちらからの話題提供も必須だ。話さずとも済むことを信頼の証とばかりにべらべら喋った。なんの疑いもなく僕は、人間関係にアクティブな性質を発揮していた。

間違いであつた。そのいきすぎた社交性は、帰省の夜、特に仲もよくなかつた三つ上の従兄弟に対しても存分に発揮された。

「へえ、いいよ」

僕の小説を見てくれるか、との問いに、彼はとても快く首肯した。無論この僕の、小説を書いていることの暴露は、八割ぐらいがただの話題作りに等しい。積極性、社交性に取り付かれ、手段が目的化している。そして自身、そのことに気づかなくなっている。あれほど人目を忍んで書いていた僕が、何の得があつて他人に——それも後々も付き合つていかなければならない親族にそれを打ち明けてしまふのか。バカになつていたのだ。バカになれば小説の天才とか思つていたのだろう。

そうして滅茶苦茶をやらかした結果がこれだ。「いろいろとパクリが露骨じゃないか」僕が書き散らしたお粗末な作品群に目を落として、「これなんかアレに似てる。何だっけ……。まあ基本、アニメとか漫画とかの模倣だね。パクリ全てを否定はしないけど、明らかにそうと思われてしまふものはまずいかな。ああ、一応これは業界の考え方だからね」

それはその……と、僕は弁解をしたかつた。あとから僕も気づいたんだ。言い訳をするようだけど、書いたときは何もわからなくなつていたんだ。無意識の模倣……。

何らかの過ち、それが確信的であつたか無意識であつたかの違いは、重大な違いであると、今の僕は考える。何事も確信的である方が遙かに良い。例えひどすぎる過失であつても、それが？覚えのあることならば……。それなら、自分の意思で修正は可能になり得るのだし、過ちそれ自体に納得がいくものだ。俺はパクろうと思つ

てパクったんだ！ と、声高らかに。

しかし、無意識は病気だ。自身すらも認めていない行動、それが他人にも認められず、結果として誰のための行動でもない。これが一番の無益である。僕が今、狂躁から醒めて冷静に自分の小説を見るに、あらまあ、意味のないパクリが続出。

誰の名言だったか忘れたが、ここでうる覚えの引用をしよう。

努力して成功を得ることが最もよい。

努力しての失敗が次によい。

努力せずに痛い目を見るのがその次。

最悪なのは全く努力せず成功してしまうことだ。

うる覚えな上に自己流のアレンジを加えていてなかなか痛いことになっているのだが、これもパクリストとしての僕の手腕によるものだから大目に見てほしい。

言いたいことはこの名言の通りである。最も怖いのが、無意識に成功してしまうことだ。悩まず、勢いと盲信に任せて、後になって振り返れば全く不本意な行動。それが何かの間違いで絶賛でもされようものなら、勘違い、舞い上がり、挫折を経て、やがて、当人の内に沸き起こるのは激しい嫉妬だ。それも、最も近い自己への。僕は、どこの誰が気に食わない発言をしたって実際そこまで腹は立たない。なんせ世界で一番注目するものが自分自身であり、つまりは自意識過剰、自分が好き、自分が嫌い、だから僕は、嫌悪する自己の一面を他人に評価されてしまうのが一番困るのだ。苦手な人に愛想笑いしているときに「笑顔が素敵だね」なんて、男の僕が言われる機会なぞ皆無だろうけど、仮にそう言われたとしてみる！ もつと愛想笑いしろってのか、ふざけんな！ そういうことだ。

以前に一度、これはこの従兄弟の件より深い苦悩として僕の心に根付いていることなのだが、あまりに本心を殺して偽善的に書いた作品をネットに公開したところ予想外の高評価を得てしまい、後日、我にかえった僕は啞然とする。偽善の、うす汚い僕の媚びへつらいが世に（たかがネットだが）認められてしまった。嘘を褒められた。

ならば何を信じればいい！ 僕は嘆く。それは裏を返せば、本当の僕が拒絶されているのと同義だ。そして、その状況を作り出してしまったのは他でもない僕自身だという、この、救いようのない事実。だから、そうして従兄弟の編集者に真っ向からパクリを否定されたことは、僕にとってはかえって心地の良い断罪だった。本当なら、この長つたらしい言い訳もついでに彼にぶつけられたら最上なのだが、見苦しいのでやめた。

いや、もう、現時点の悩みはパクリとか下手とかの次元ではない。無論それともいきなり絶叫を上げたいくらいの羞恥だが、なんにせよ、親族全体に僕の秘密の趣味がばれたということが、最悪だ。取り返しようのない、ただ、ただ、そのことを思えば後悔が沸くのみ。こうなればやけくそ。小説で大成して、この恥ずかしい児童ノベルを誰の目にも見事な所業へと変えてしまうしかない。もうそれしかない。

「無理だろ（笑）。だって悪いけど、内容がどれも薄くて軽くて、苦勞せず生きてきたのがバレバレじゃん」

酒が入っているので残酷な物言いだ。最初に小説を見せたあの日から数ヶ月経ち、もう公けであるのをいいことに、僕はたまに東京に足を運んで、業界人である彼の意見を教授してもらうようになった。怪我の功名といえはもう一つ、家族の前でも比較的堂々と執筆できるようになったことが挙げられるが、しかしそんな些細なことよりも、こうして他人の率直な意見が聞けるのは、痛いと同時に有益なことである。

「小説やめて、筋トレでもしなよ。そっちのが遥かに意味あるよ」
まだまだ、ということか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7282t/>

短編集八キダメ

2011年12月18日15時49分発行